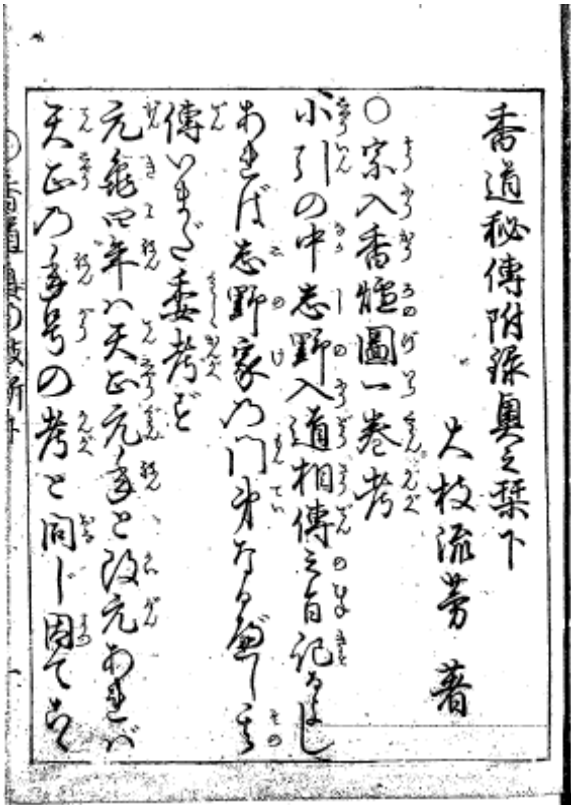


香道秘傳附録奥之栞 下

大枝流芳 著

○宗入香爐図一巻考

小引(しょういん)の中、志野入道相伝の旨記するよしあれば、志野家の門弟なるべし。その傳いまだ委しく考えず。

「元亀四年」は、天正元年と改元あれば、天正の年号の考えと同じ。因ってここ

【凡例】

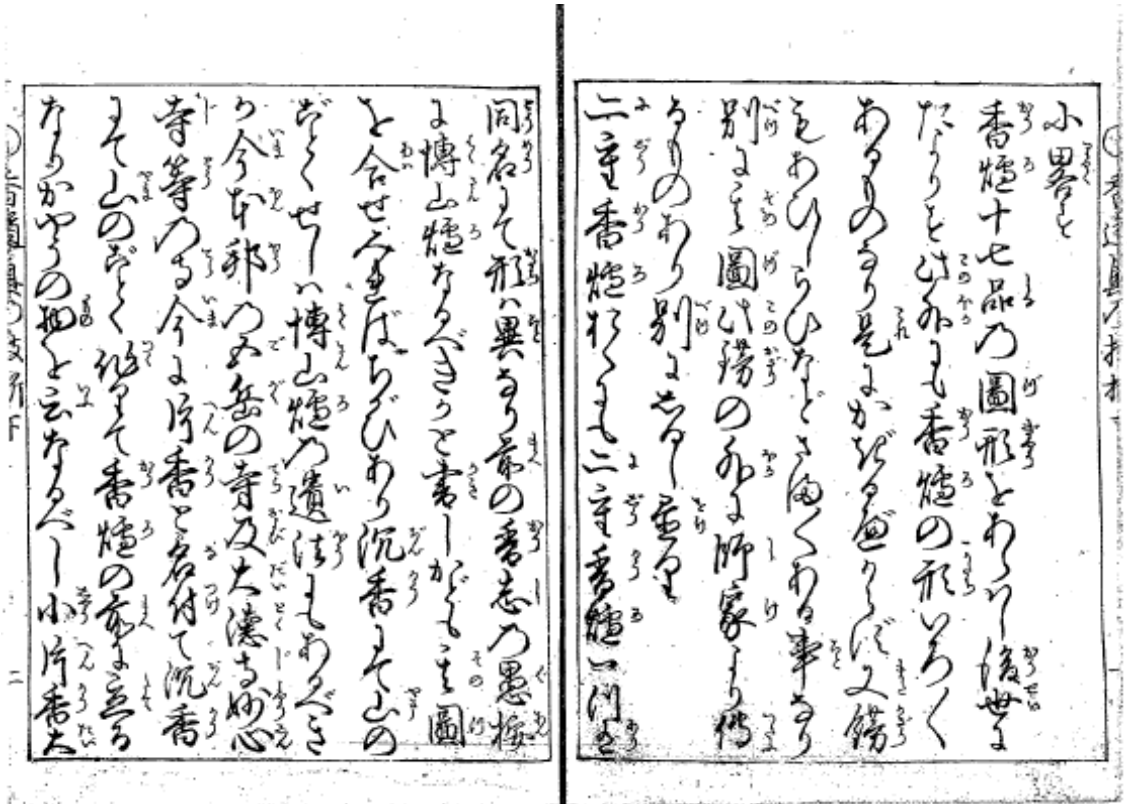
① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。

② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。

③ 黒字の()は、本文内に小文字で記された注記です。

④ 青字の()は、筆者の補足です。

⑤ 傍線は、『香道秘伝書』の条々に記載された項目です。

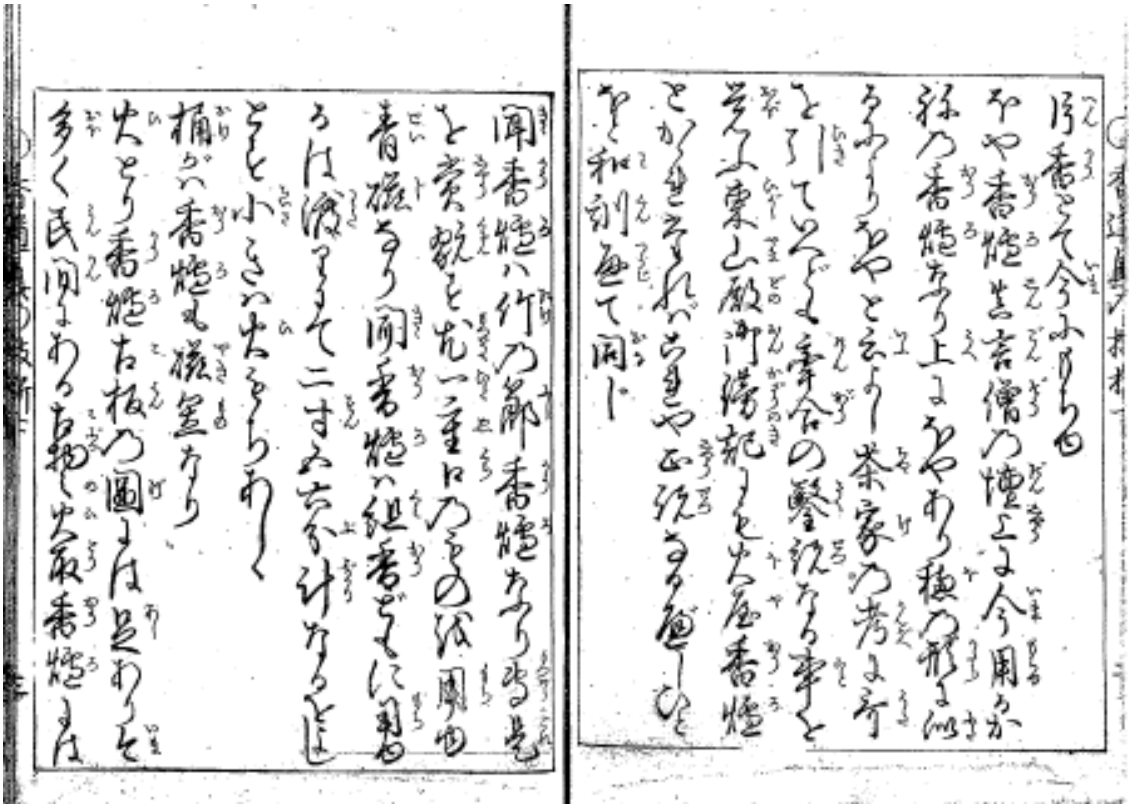


小畧と
香爐十七品の圖形とあらわし後世
たよりとす此外にも香爐の形いろ
いろあるものなり是よりかざるべし又餝
もあいしらいなどさまざまある事なり
別にその圖此餝の外に師家より傳
るものあり別してしるし置けり
二重香爐おくにも二重香爐一つあり

同名にて形は異なり前の香志の愚按
に博山爐なるべきかと書しかども其圖
を合せみればちがひあり沈香にて山の
ごとくせしは博山爐の遺法にもあるべ
き歟今本邦の五岳の寺及大德寺妙心
寺等の寺今に片香と名付て沈香
にて山のごとく作りて香爐の前に立て
なりかやうの物を云なるべし小片香大

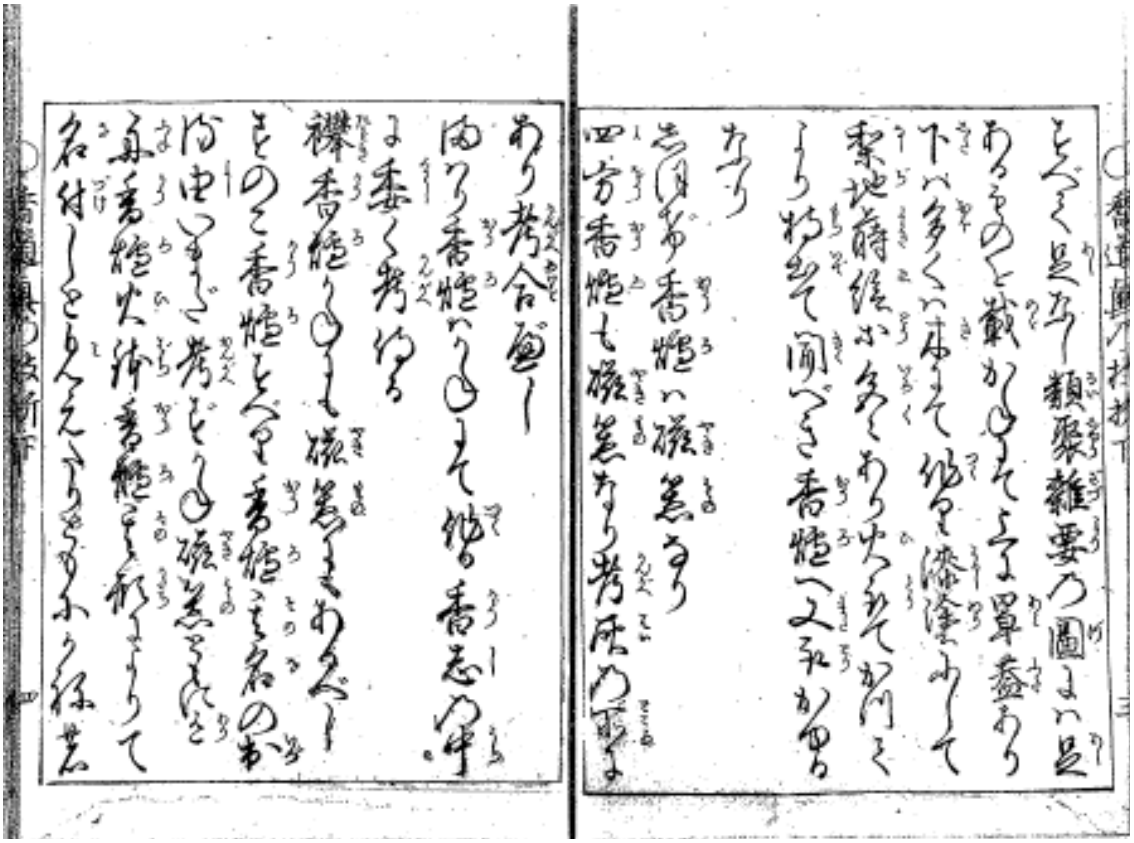
に略す。
「香爐十七品の図形」をあらわし、後世に
たよりす。この外にも香爐の形いろいろ
あるものなり。これにかざるべからず。また、餝（かざり）
もあいしらいなど、さまざまある事なり。
別にその図、この餝の外に師家より伝う
るものあり。別してしるし置けり。
「二重香爐」、おく（奥＝後）にも二重香爐一つあり。

同名にて形は異なり、前の「香志」の愚按
に「博山爐なるべきか」と書きしかども、その図
を合わせみればちがいあり。沈香にて山の
ごとくせしは、「博山爐」の遺法にもあるべき
か。今、本邦の五岳の寺及び大徳寺、妙心
寺等の寺、今に「片香（へんこう）」と名付けて、沈香
にて山のごとく作りて、香爐の前に立てる
なり。かようの物を云うなるべし。「小片香」「大



片香」とて今にもちゆ。
「ほや香爐」、真言僧の壇上に今用ゆる。かね(金)の香爐なり。上にほやあり。「穂」の形に似たるにより「ほや」と云うよし。茶家の考えに歌を引きていえども、牽合(けんごう)の鑿説(さくせつ)なる事を覚う。『東山殿御飾記』にも「火屋香爐」とかかれたれば、これや正説なるべし。「ひ」と「ほ」と和訓通じて同じ。

「聞香爐」は竹の節香爐なり。専らこれを賞翫す。もっとも一重口のものを用ゆ。青磁なり。聞香爐は組香どもに用ゆるは、渡りにて二寸五、六分ばかりなるをよしとす。小さきは火もちあし(悪)し。
「桶がわ香爐」も磁器(やきもの)なり。
「火とり香爐」、古板の図には足あり。今、多く民間にある古物の火取香爐には、



すべて足なし。『類聚雑要』の図には、足あるものを載す。かねにて上に罨蓋(あみぶた)あり。下は多くは木にて作り、漆塗にして梨地、蒔絵等、色々あり。火取りて、かつて(勝手)より持ち出て聞くべき香爐へ、また取りかゆるなり。

「しほげ香爐」は磁器なり。

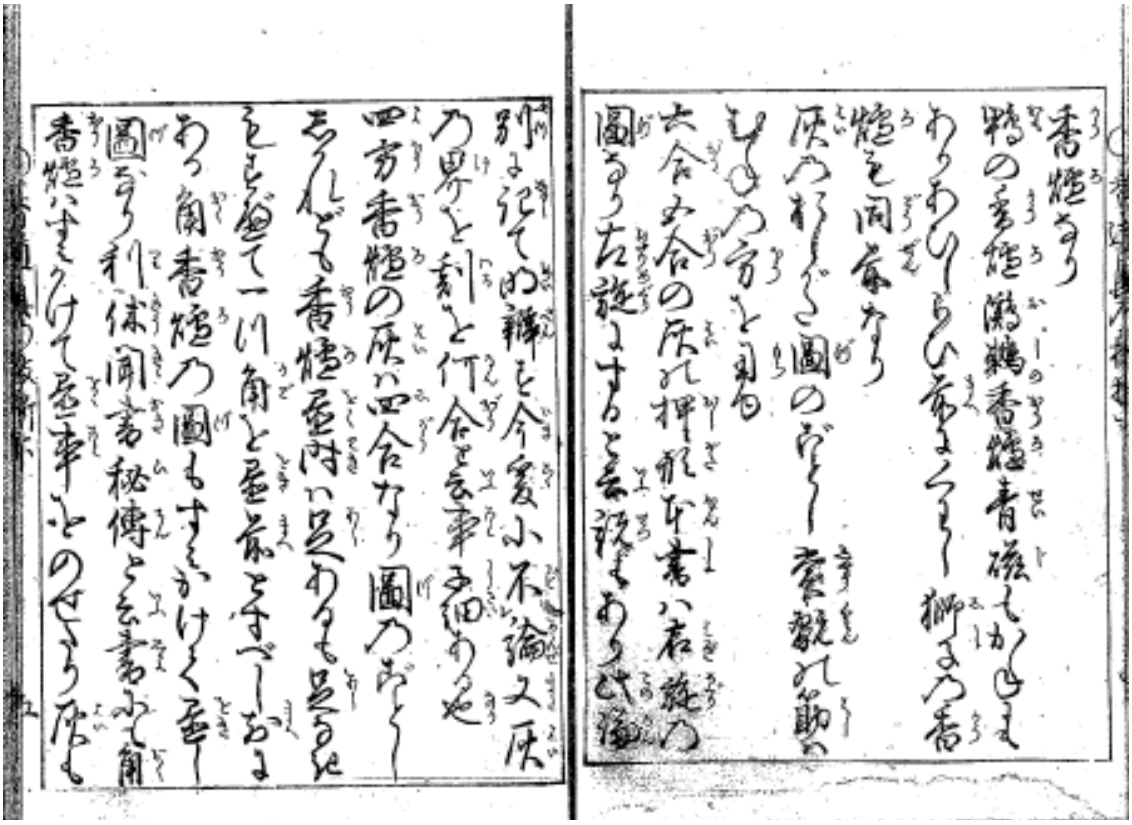
「四方香爐」も磁器なり。考え、「灰」の所にあり。考え合わすべし。

「まわり香爐」は、かねにて作る。「香志」の中に委しく考え侍る。

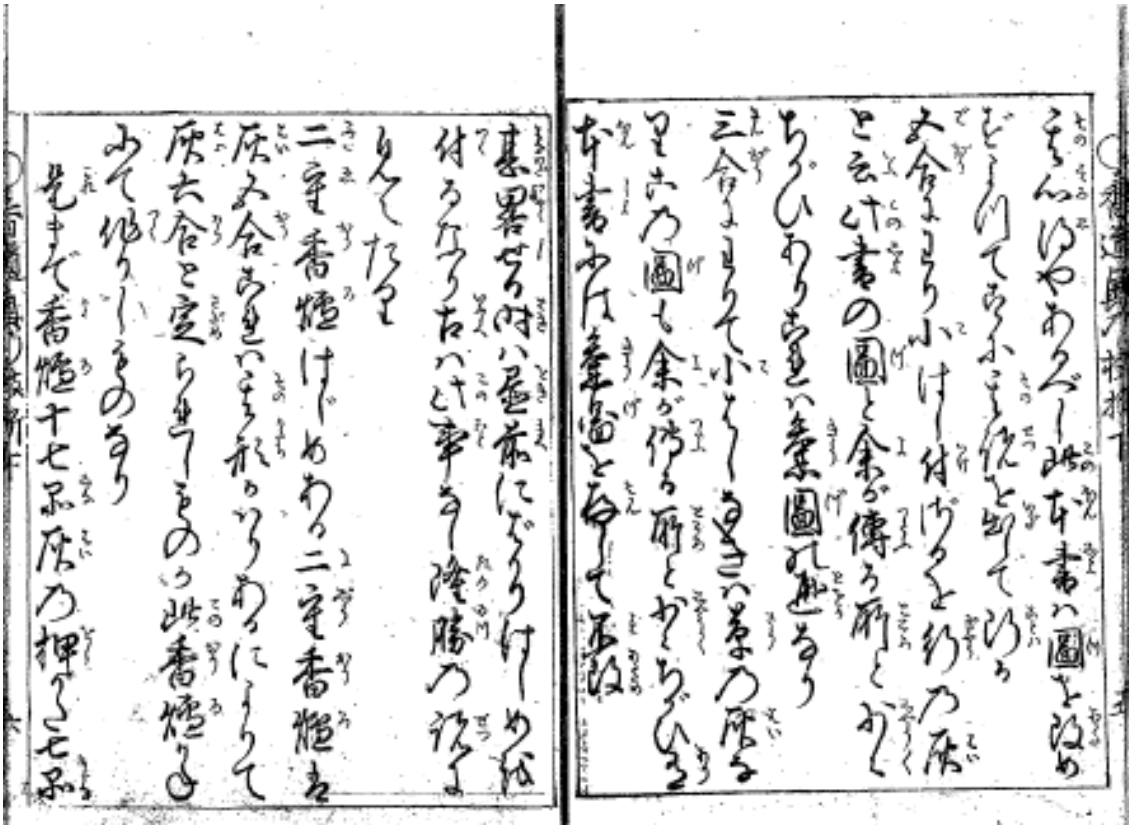
「襷(たすき)香爐」、かねにも磁器にもあるべし。

「すのこ香爐」、「すべり香爐」、その名の出る由いまだ考えず。かね、磁器ともにあり。

「舟香爐」、「火鉢香爐」、その形によりて名付けしと見えたり。ともにかねの

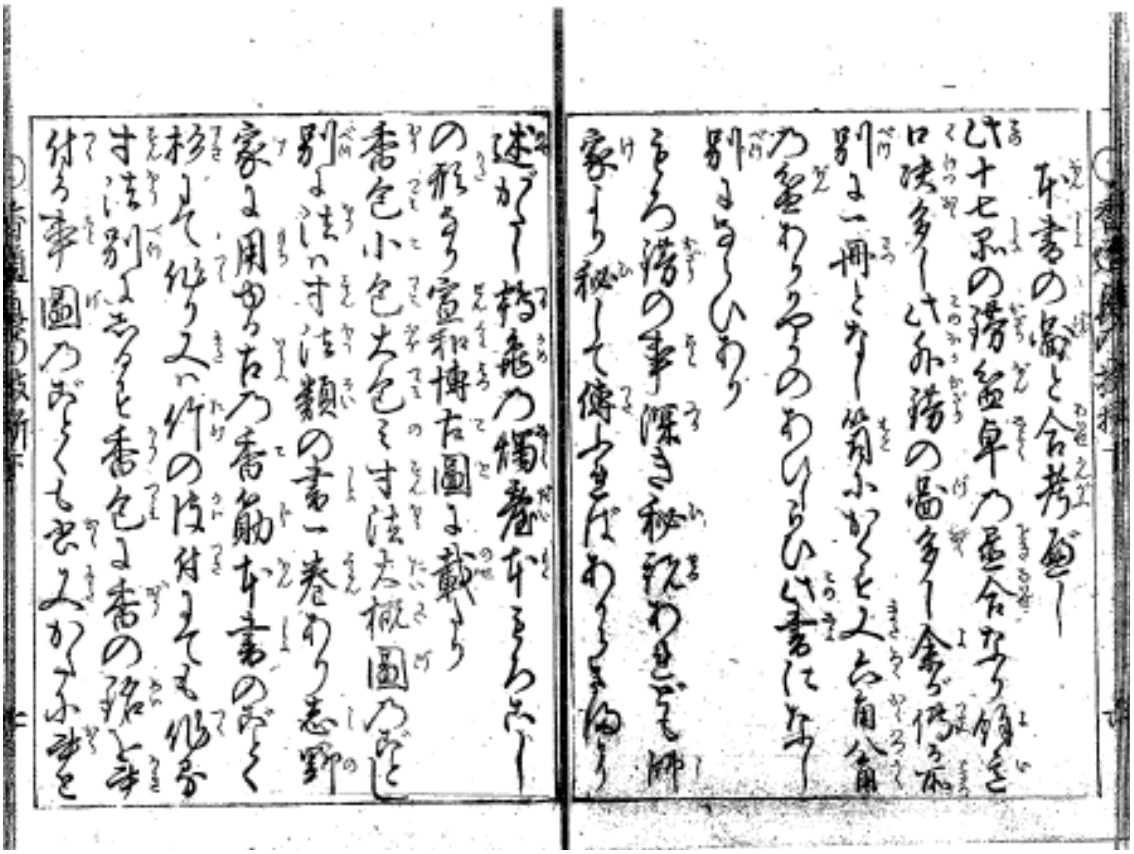


香爐なり。
「鴨の香爐」、「鷁鶴(おし)香爐」、青磁もかねにもあり。あいしらい、前にくわし。「獅子の香爐」も同前なり。
灰のおしがた、図のごとし。賞翫の筋はむねの方を用ゆ。
六合、五合の灰の押し形、本書は右旋(めぐり)の図なり。左旋にすると云う説もあり。この論、別に記して明辯す。今、ここに論ぜず。また、灰の界を割るを「何合(なんごう)」と云う事、子細あるなり。
「四方香爐」の灰は、四合なり。図のごとし。
しかれども、香爐置く時は、足あるも足なきも、すべて一つ角を置き前(◇)とすべし。前にある「角香爐」の図もすみかけて(□)置きし図なり。『利休聞書秘伝』と云う書にても角香爐はすみかけて置くことをのせたり。灰も

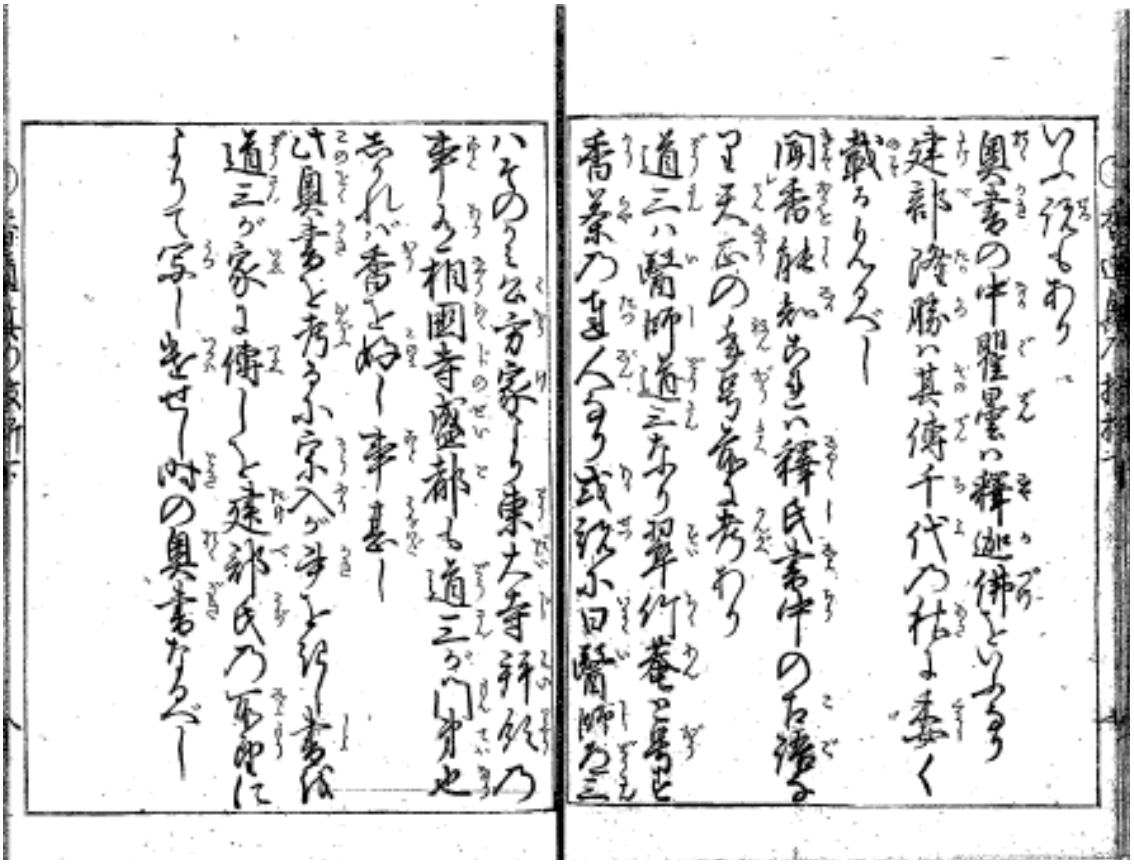


その心得やあるべし。この本書は図を改めず。よって、ここにその説を出して断る。
五合にわり、小はし（箸目）付けざるを「行の灰」と云う。この書の図と余が伝うる所と少々ちがいあり。これは舊図（きゆうず＝旧図）の通りなり。
三合にわりて、小はしなきは「草の灰」なり。この図も余が伝うる所と少々ちがいあり。
本書には舊図を存して改めず。

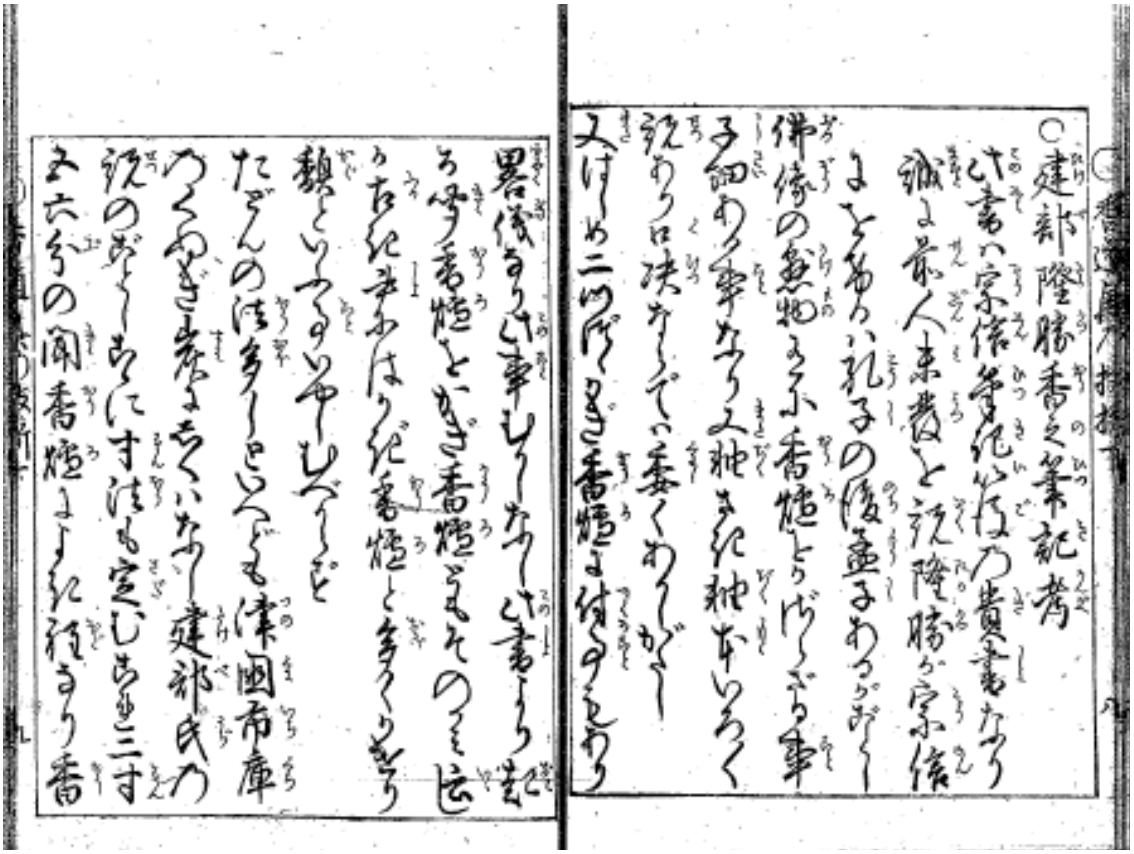
甚だ略せる時は、置き前にばかり、はしめをつくるなり。古はこの事なし。隆勝の説に見えたり。
「二重香爐」、はじめある二重香爐は灰五合、これは、その形かわりあるによりて、灰六合と定められしものか。この香爐、かねにて作りしものなり。
これまで、香爐十七品、灰の押しかた七品、



本書の図と合わせ考うべし。
この十七品の餞、盆、卓の置き合わせなり。餘意、
口訣多し。この外、餞の図多し。余が伝うる所、
別に一冊となし、笥にかくす。また、六角、八角
の盆あり。かようのあいしらい、この書になし。
別にならいあり。
もろ餞の事、深き秘説あれども、師
家より秘して傳うれば、あからさまに
述べがたし。「鶴亀の燭臺(しょくだい)」、本もろこし
の形なり。「宣和博古図」に載せたり。
香包、小包、大包の寸法、大概図のごとし。
別に法は、寸法類の書一巻あり。志野
家に用ゆる古の香筯、本書のごとく
杉にて作り、または竹の皮付きにても作る。
寸法、別にしるす。香包に香の銘を書き
付くる事、図のごとくも書く。また、かた(肩)に書くと

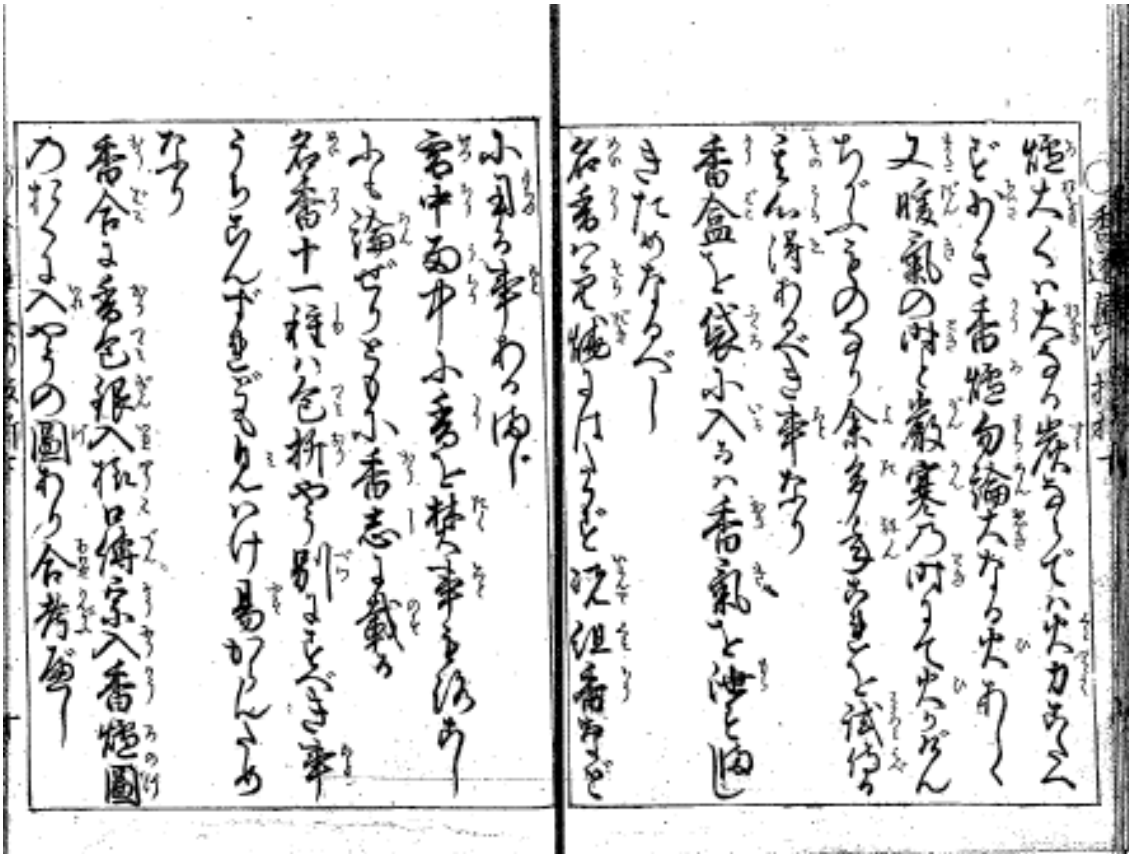


いう説もあり。
奥書の中、「瞿曇(ぐどん)」は釈迦佛をいふなり。
建部隆勝は、その傳『千代乃秋』に委しく
載する。見るべし。
香を聞きて、能く知る。これは、釋氏書中の古語な
り。天正の年号、前に考えあり。
「道三」は、醫師(いし)道三なり。翠竹菴(すいちくあん)と号す。
香茶の達人なり。或る説に曰く「醫師道三
は、そのかみ公方家より、東大寺拝領の
事あり。相国寺の盛都も道三が門弟なり。」
しかれば、香を好みし事、甚だし。
この奥書を考うるに、宗入が書きおきし書を
道三が家に傳えしを建部氏の所望に
よりて写し、遣わせし時の奥書なるべし。



○建部隆勝香之筆記考

この書は、宗信筆記以後の貴書なり。誠に前人未発を説く。隆勝が宗信におけるは、孔子の後、孟子あるがごとし。佛像の懸物在るに香爐を飾らざる事、子細ある事なり。また、軸さき、軸本いろいろ説あり。口訣ならでは委しくあかしがたし。また、はじめ二つずつ「かぎ香爐」に付くる事もあり、略儀なり。この事、昔なし。この書より起こる。「聞香爐」を「かぎ香爐」とも、そのかみ云いしか、古き書には「かぎ香爐」と多くかけり。「嗅（かぐ＝香篇に臭）」という事、いやしむべからず。たどんの法多しといえども、津の国、市庫（いちくら）のくぬぎ炭にしくはなし。建部氏の説のごとし。ここに寸法も定む。これ二寸五、六分の聞香爐によき程なり。香



爐大きくば、大なる炭ならでは、火力こたえず、少(ちいさき)香爐、勿論大きなる火あしく、また、暖気の時と厳寒の時にて、火かげんちがうものなり。余、多年これを試み侍る。その心得あるべき事なり。

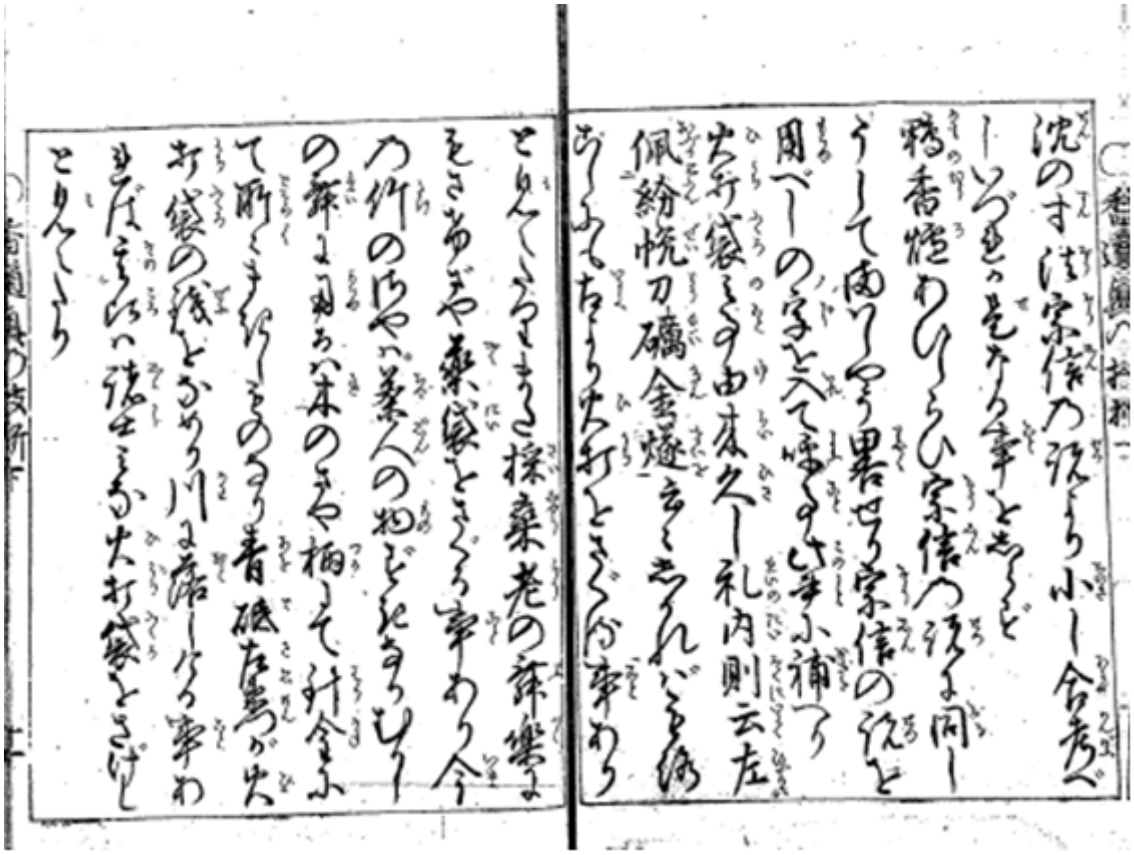
香盒(こうばこ)を袋に入るるは、香気を泄(もら)すまじきためなるべし。

名香は、空焼にはたかず。況(いわんや)や組香などに用ゆる事あるまじ。

雪中、雨中に香を焚く事、もろこしにも論ぜり。ともに「香志」に載する。

名香十一種は、包折よう別にすべき事うちこんずれども、見わけ易からんためなり。

香合(こうばこ)に香包、銀入れ様口傳、宗入香爐図のおく(奥)に入れようの図あり。合わせ考うべし。

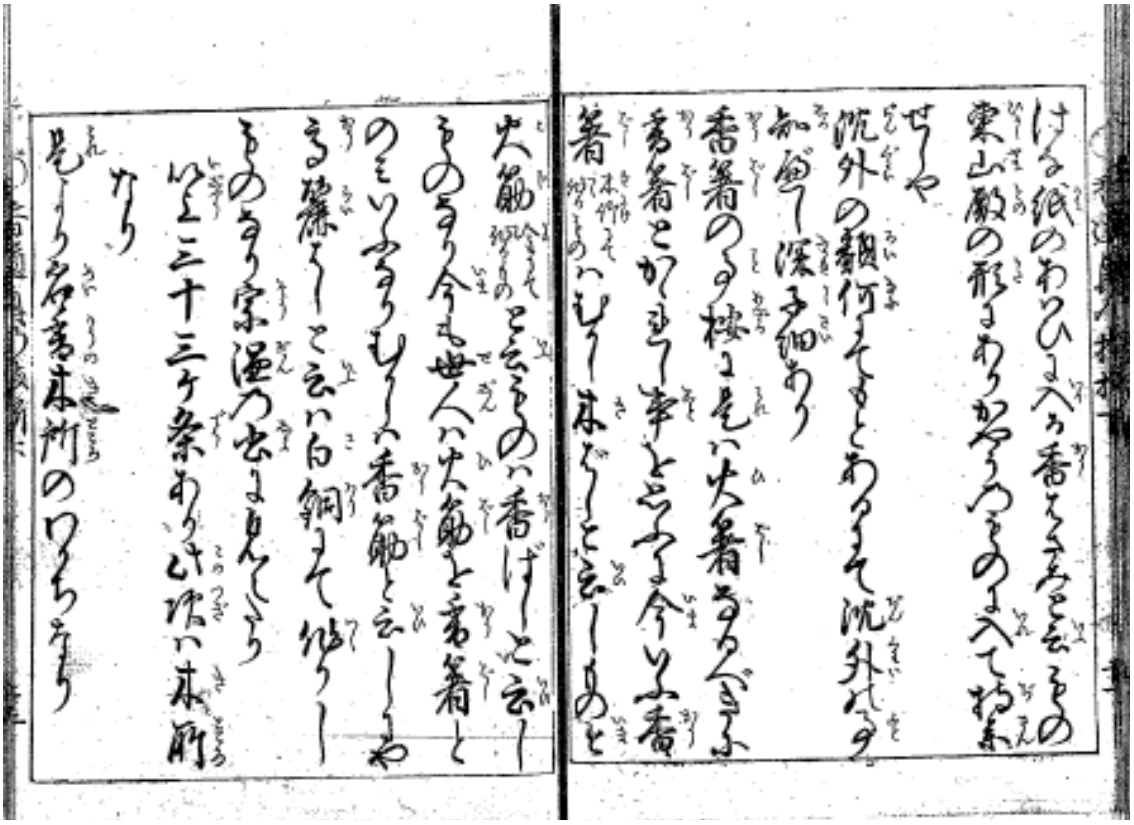


沈の寸法、宗信の説より小さし。合わせ考うべし。いずれか是なる事をしらず。

鴨の香爐あいしらい、宗信の説に同じうして、まわしよう略せり。「宗信の説を用ゆべし。」の字を入れて呼ぶ事、この書に補えり。

火打袋の事、由来久し。『礼』の「内則（だいそく）」に云く、「左佩紛悅刀礦金燧云々。」（ふんぜい、とうれい、きんすいをひだりにおぶる）しかれば、もろこしにも古より火打ちをさぐる事あり

と見えたり。また、「採桑老（さいしょうろう）」の舞楽にもさげざや薬袋をさぐる事あり。今の竹のさやは、茶人の物ずきなり。むかしの舞に用ゆるは、木のさや柄にて、針金にて所々まきしものなり。青砥左衛門が火打袋の銭をなめり川に落としける事あれば、その頃は、諸士みな火打袋をさげしと見えたり。



はな紙のあわいに入る「香はさみ」と云うもの、東山殿の形にあり。かようのものに入れて持参せしや。

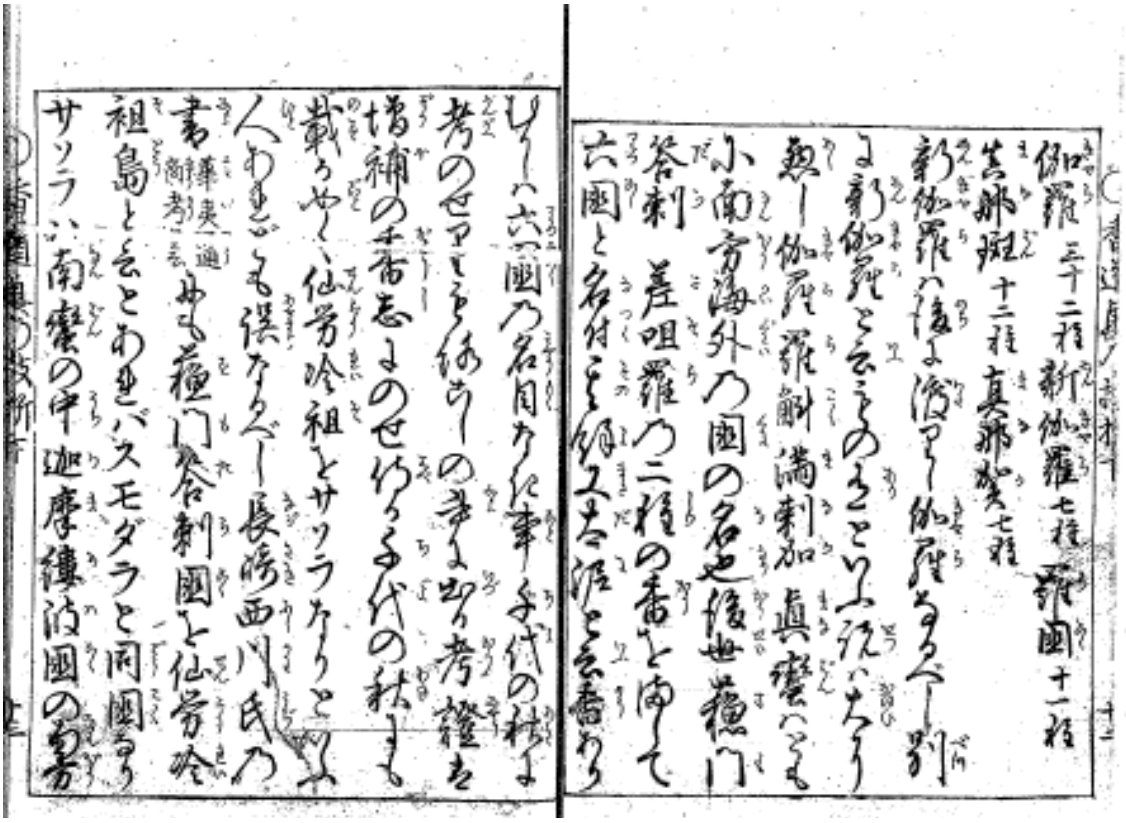
沈外の類、何にてもとあるにて、沈外の事知るべし。深き子細あり。

「香箸(こうばし)」の事、按ずるにこれは火箸(ひばし)なるべきに、香箸とかかれし事を思うに、今いう香箸(木、竹にて作るもの)は、むかし「木ばし」と云いしもの、今「火筋(こじ)」(金にて作るもの)と云うものは、香ばしと云いしものなり。今も世人は火筋を香箸とのみいうなり。むかしは香筋と云いしにや。

「高麗ばし」と云うは、白銅(さはり)にて作りしものなり。宗温の書に見えたり。

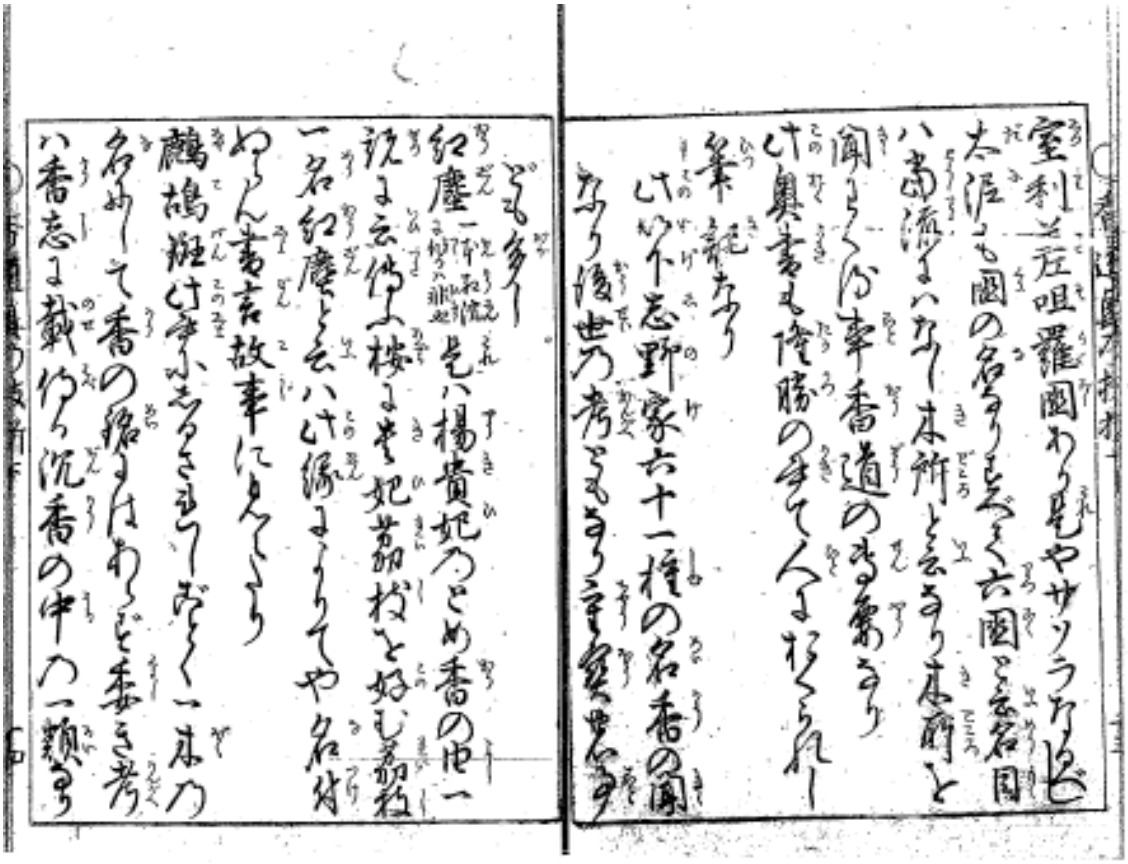
以上、三十三ケ条あり。この次は木所なり。

これより名香木所のわかち(分)なり。



伽羅　三十二種　新伽羅　七種　羅国　十一種
真那斑　十二種　真那賀　七種
新伽羅は後に渡りし伽羅なるべし。「別
に新伽羅と云うものあり」と云う説は、大いに
悪しし。伽羅、羅斛（らこく）、満剌加（まなか）、眞蠻（まなばん）は、とも
に南方海外の国の名なり。後世、蘓門
答剌（すもだら）、差咀羅（さそら）の二種の香をまして、
「六国」と名付く。その餘、また「太泥（だに）」と云う香あり。

むかしは、六国の名目なき事、『千代の秋』に
考えのせり。もろこしの書に出ずる考證は
増補の「香志」にのせ侍る。『千代の秋』にも
載るごとく「仙労冷祖（せんろうれいそ）」を「サソラなり」という
人あれども、誤りなるべし。長崎西川氏の
書（『華夷通商考（かいつうしょうこう）』と云う）にも「蘓門答剌国
を仙労冷
祖島と云う」とあれば、スモダラと同国なり。
サソラは南蠻の中、迦摩縷波国（かまるはこく）の南方、



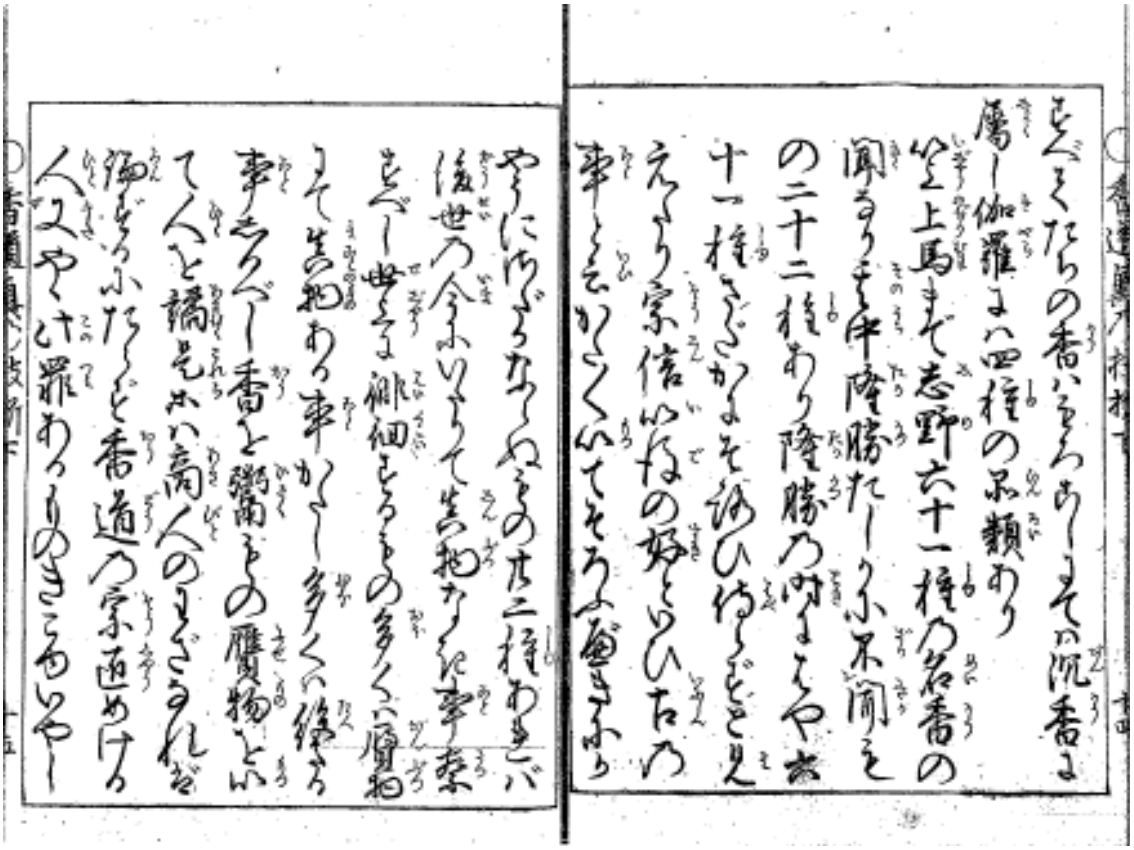
室利差咀羅国（しつりさそらこく）あり。これやサソラなるべし。太泥も国の名なり。すべて六国と云う名目は当流にはなし。「木所」と云うなり。木所を聞きわくる事、香道の専要なり。この奥書も隆勝の書きて人におくられし筆記なり。

この以下、志野家六十一種の名香の聞なり。後世の考えともなり。重寶の事

ども多し。

「紅塵」（一本、「紅沈」に作るは非なり。）これは、楊貴妃のとめ香の由、一説に云い伝う。按ずるに貴妃、荔枝（れいし）を好む。荔枝、一名「紅塵」と云うは、この縁によりてや名付けぬらん。『書言故事』に見えたり。

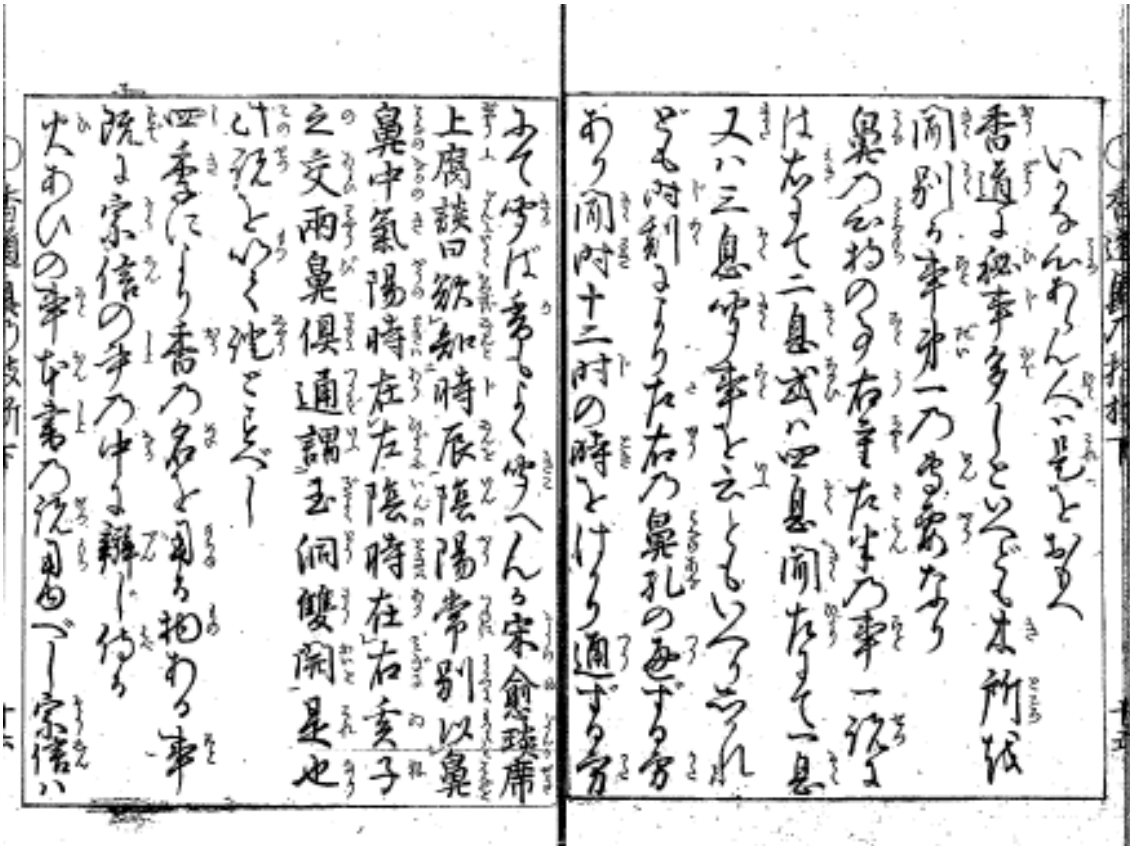
「鷓鴣斑」、この書にしるされしごとく、一木の名にして、香の銘にはあらず。委しき考えは「香志」に載せ侍る。沈香の中の一類なり。



すべてたちの香は、もろこしにては沈香に
属し、伽羅には四種の品類あり。

以上、「上馬」まで、志野六十一種の名香の
聞きなり。その中、隆勝たしかに聞かざるも
の二十二種あり。隆勝の時は、はや六
十一種さだかにそろい（揃）侍らずと見
えたり。宗信以後の好きと云い、古の
事と云い、かたがた以ってそろうべきに、か

ようにさだかならぬもの二十二種あれば、
後世の今にいたりて、真物なき事、察
すべし。世上に徘徊するもの、多くは贋物
にて真物ある事かたし、多くは絶えたる
事しるべし。香を鬻（ひさ）ぐもの贋物を以っ
て人を譎（あざむく）。これ等は商人のわざなれば、
論ずるにたらず。香道の宗匠めける
人、また、ややこの罪あるものきこゆ。いやし



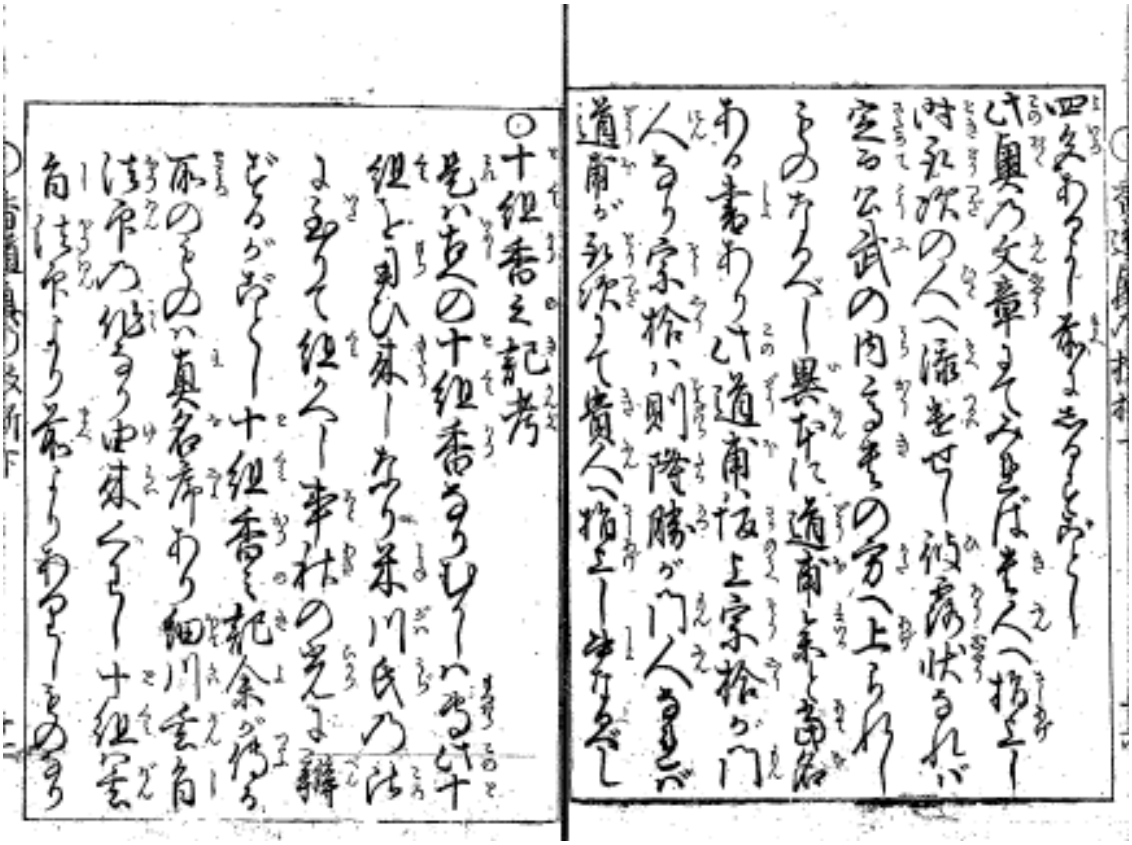
いかな、心あらん人は、これをおもえ。

香道に秘事多しといえども、木所を聞き別くる事、第一の専要なり。

鼻の心持の事、「右重左半（うちょうさはん）」の事、一説には、「右にて二息或いは四息聞く。左にて一息または、三息聞く事を云う」ともいえり。しかれども時刻により、左右の鼻孔の通ずる方あり。聞く時、十二時の時をはかり、通ずる方にて聞かば、香もよく聞こえんか。宋の愈琰（ゆだん）が『席上腐談』に曰く、「時辰を知らんと欲すれば、陰陽、常に別つに鼻を以ってす。鼻の中の気、陽の時は左にあり。陰の時は右にあり。亥子の交、両鼻倶に通ず。玉洞雙開と謂う、これなり。」この説を以って証とすべし。

四季により、香の名を用ゆる物ある事、既に宗信の書の中に辯じ侍る。

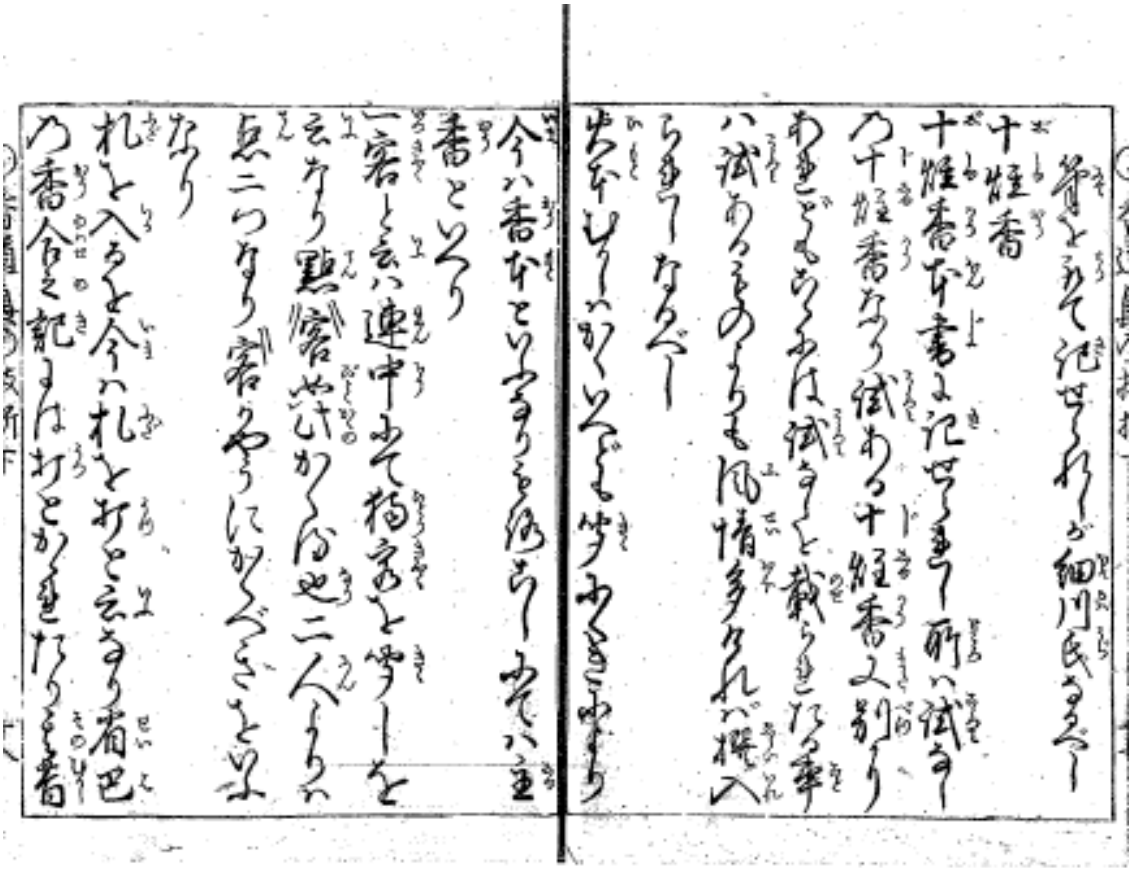
火あいの事、本書の説用ゆべし。宗信は



四色あるよし、前にしるすごとし。
この奥の文章にてみれば貴人へ指し上げし
時、取次ぎの人へ添え遣わせし被(披)露状なれば
定めて、公武の内、高貴の方へ上げられし
ものなるべし。異本に「道甫参る」と当て名
ある書あり。この「道甫(どうほ)」は、坂上宗拾(そうじゅう)が門
人なり。宋拾は則ち、隆勝が門人なれば、
道甫が取り次ぎにて貴人に指し上げし書なるべし。

○十組香之記考

これは、古えの十組香(とくみこう)なり。むかしは、専らこの十
組を用い来たりしなり。米川氏の頃
に至りて、組かえし事、『秋の光』に辯
ずるがごとし。『十組香之記』、余が伝うる
所のものは、真名序あり。細川玄旨(げんし)
法印の作りなり。由来くわし。十組は、玄
旨法印より前よりありしものなり。



筆を取りて記せられしが、細川氏なるべし。

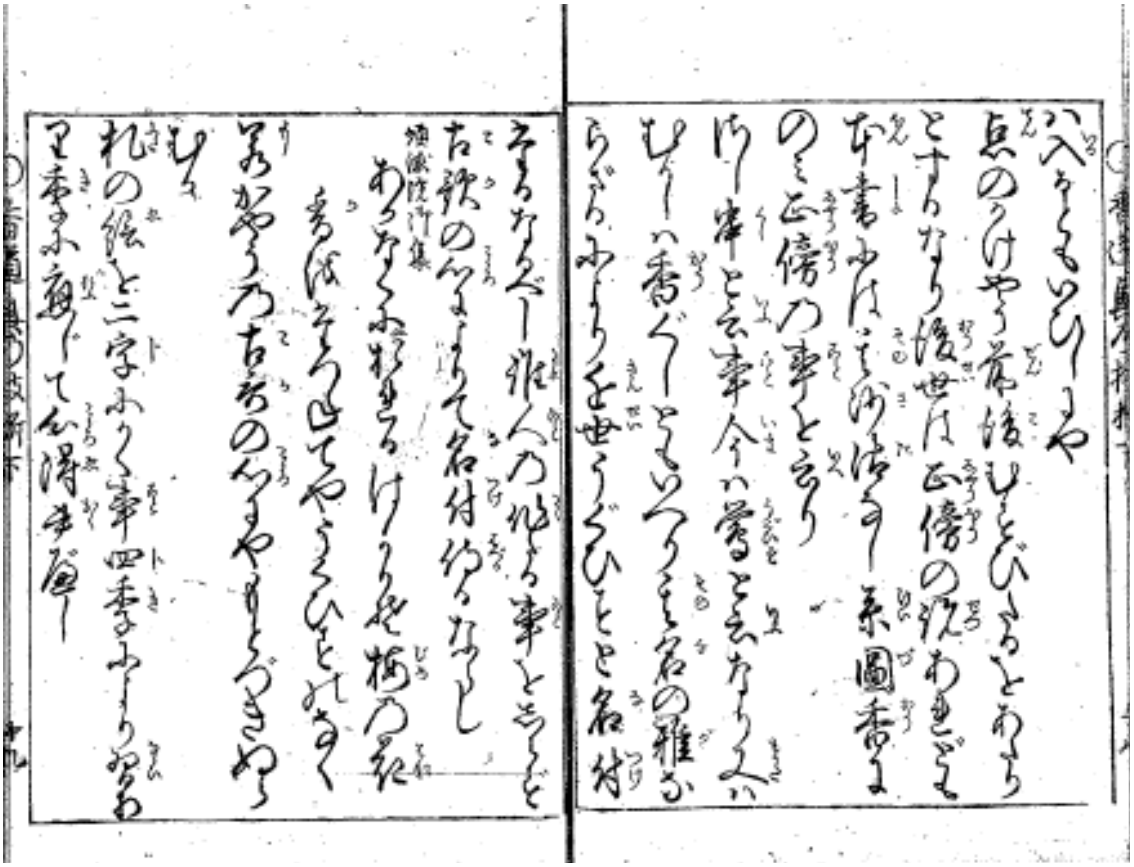
十炷香

十炷香、本書に記せられし所は、試みなしの十炷香なり。試みある十炷香、また別にあれども、ここには試みなしを載せられたる事は、試みあるものよりも風情多ければ、撰び入れられしなるべし。

「火本（ひもと）」、むかしは、かくいえども聞きにくきにより、今は「香本（こうもと）」というなり。もろこしにては「主香（しゅこう）」といえり。

「一客（いっきゃく）」と云うは、連中にて独り客を聞きしを云うなり。点（てん）「客」かくのごとくかくるなり。二人よりは点二つなり。「客」かようにかくべきをいうなり。

札を入れるを今は、「札を打つ」と云うなり。省巴の「香合之記」には、「打つ」とかかれたり。その昔



は、「入る」ともいいしにや。

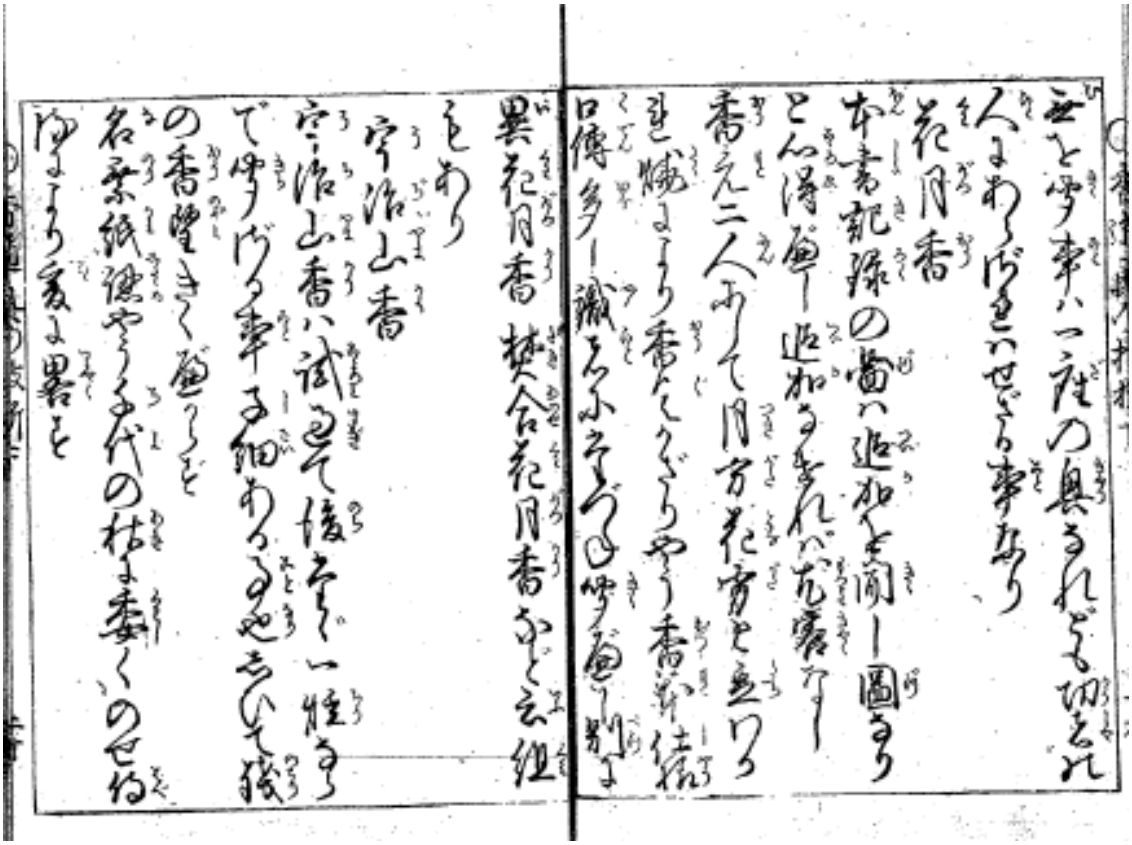
点のかけよう、前後むすびたるをあたりとするなり。後世は、「正傍（しょうぼう）の説」あれども、本書には、その沙汰なし。「系図香」にのみ正傍の事を云えり。

「さし串」と云う事、今は「鶯」と云うなり。または、むかしは「香ぐし」とも云えり。その名の雅ならざるにより、近世「うぐいす」と名付けたるなるべし。誰人の作（さく）たるを知らず。古歌の心によりて名付け侍るならし。

（順徳院御集）

「あかなくにおれるばかりぞ梅の花
　香をたづねてやうぐひすのなく」

もし、かようの古歌の心にやもとづきぬらむか。札の絵を二字にかく事、四季により習いあり。季に応じて心得書くべし。



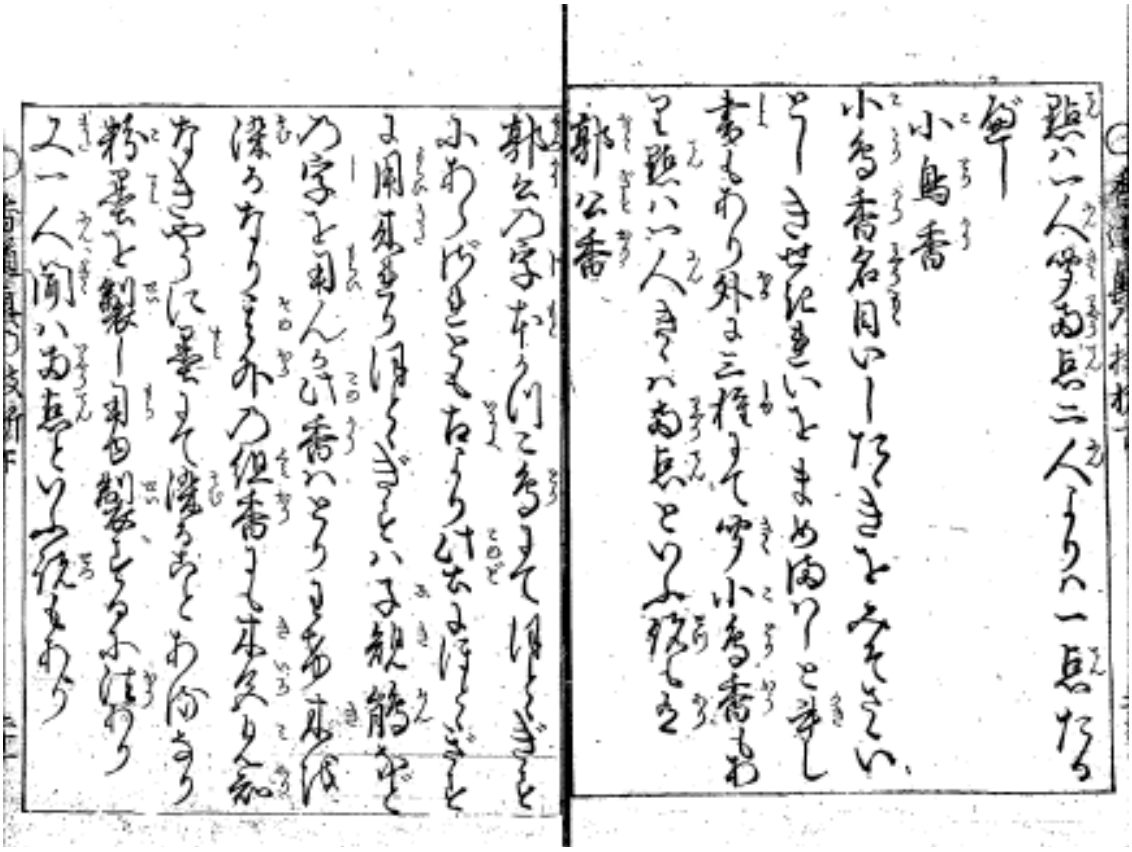
「無」を聞く事は、一座の興なれども、功者の人にあらざれば、せざる事なり。

花月香

本書記録の図は、追加を聞きし図なりと心得べし。追加なければ、尤も「客」なし。香元二人にして、「月方」、「花方」と立ちわかれ焼くにより、香具かざりよう、香本仕様、口傳多し。識者にたずね聞くべし。別に「異花月香」「焚合花月香」など云う組もあり。

宇治山香

宇治山香は、試み過ぎて後、ただ一炷ならで聞かざる事、子細ある事なり。しいて残りの香、望み聞くべからず。名乗紙認めよう、『千代の秋』に委しくのせ侍るにより、ここに略す。



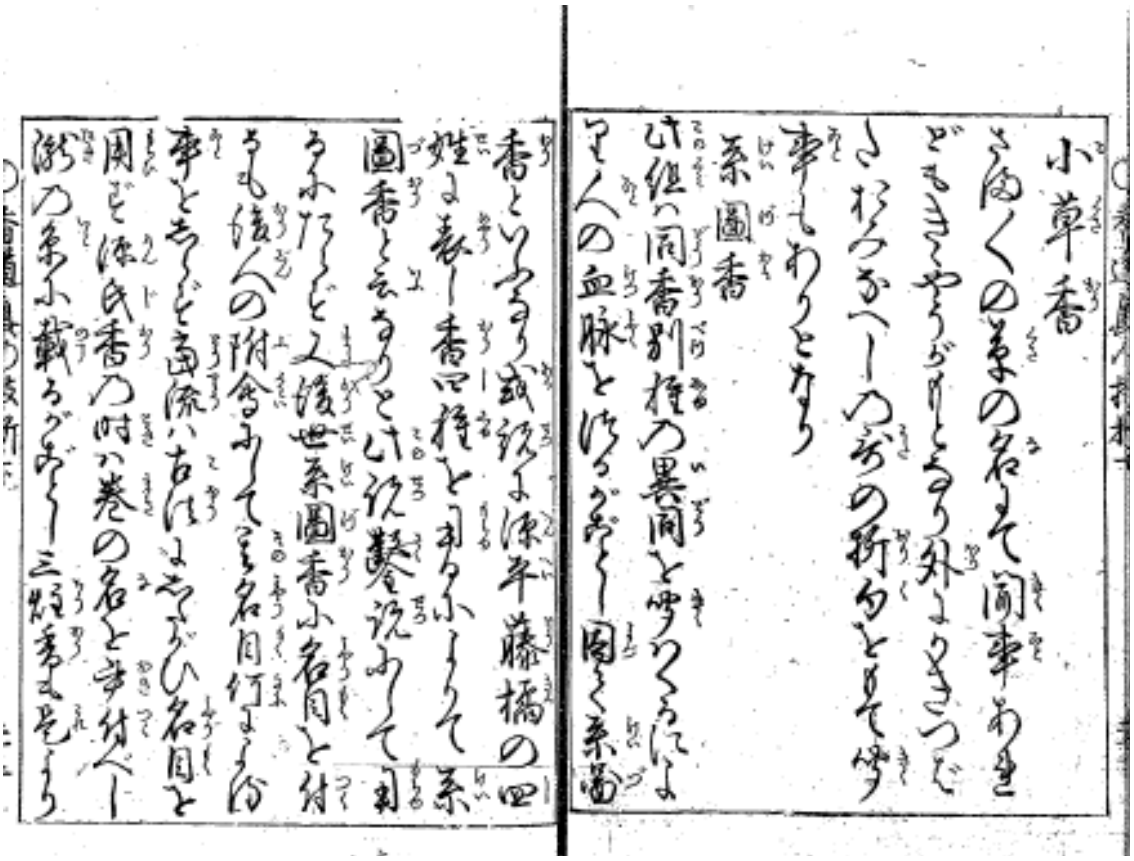
點は一人聞き両点、二人より一点たるべし。

小鳥香

小鳥香名目「いしたたき」を「みそさざい」とし、「きせきれい」を「まめまわし」と書きし書もあり。外に、三種にて聞く「小鳥香」もあり。點は、一人ぎきは両点と言う説もあり。

郭公香

「郭公」の字、本(もと)「かっこ鳥」にて、「ほととぎす」にあらざれども、古より、この土に「ほととぎす」に用い来たれり。ほととぎすは「子規」、「鵑」などの字を用いんか。この香は、とりわけ木を染むるなり。その外の組香にも木色見知りなきように墨にて染むることあるなり。粉墨を製し用ゆ。製するに法あり。また、一人聞きは両点という説もあり。

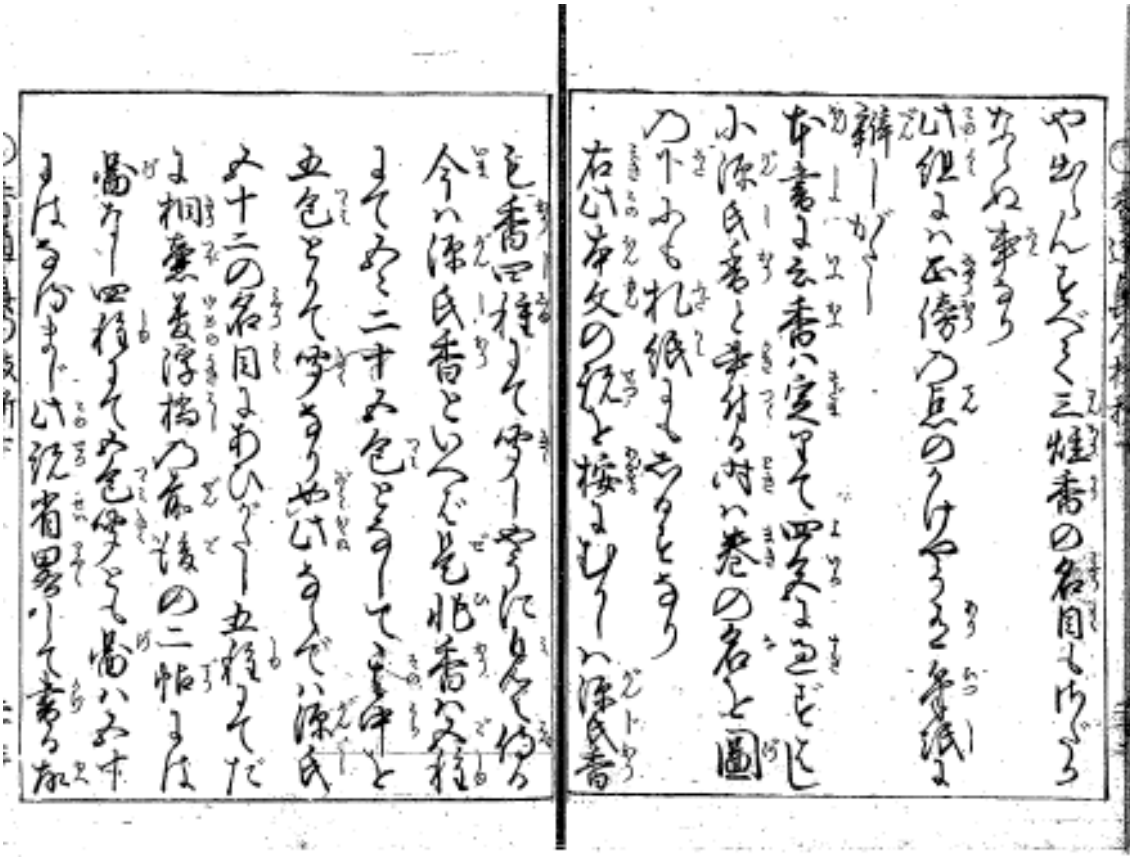


小草香

さまざまの草の名にて聞く事あれども、「ききやう（桔梗）」がもとなり。外に「かきつばた」「おみなへし」の歌の折句をもて聞く事もありとなり。

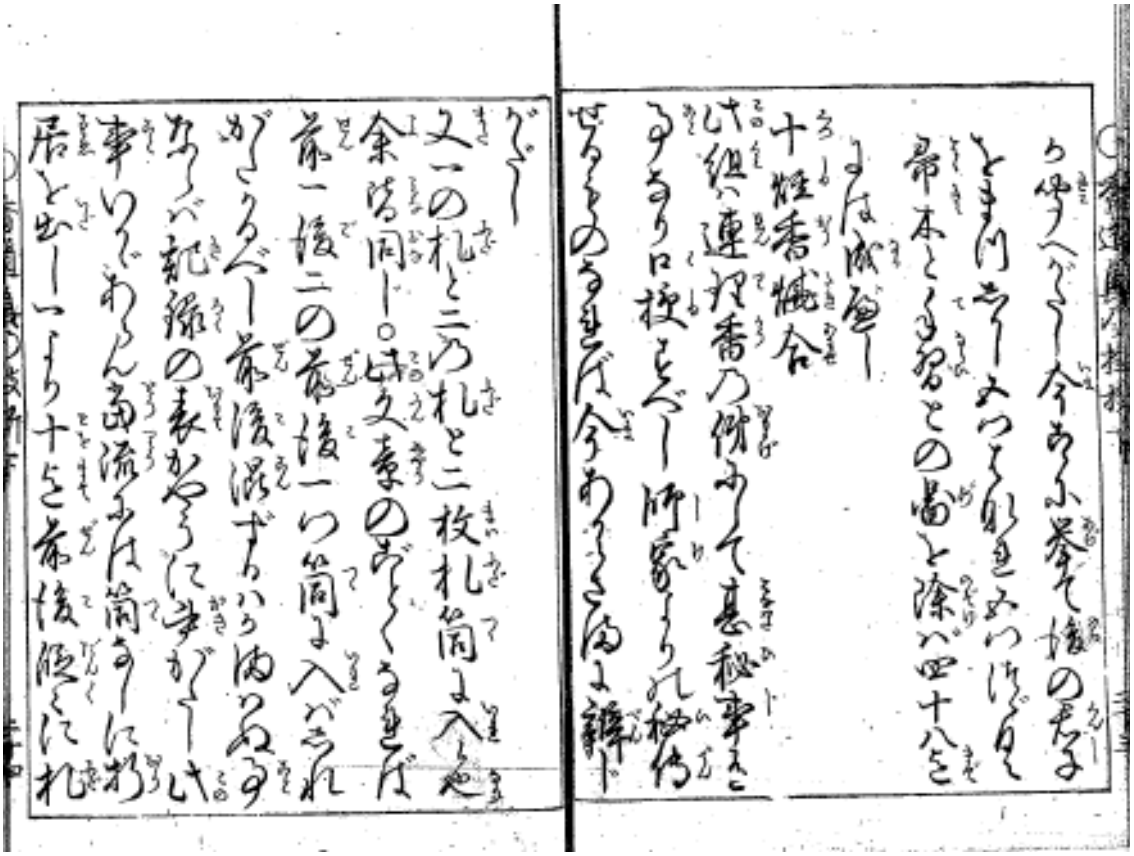
系図香

この組は、同香別種の異同を聞きわくるにより、人の血脉（脈）をつるがごとし。因つて「系図香」というなり。或る説に「源・平・藤・橘の四姓に表し、香四種を用ゆるによりて、系図香というなり」と、この説、鑿説（さくせつ）にて用ゆるにたらず。また後世、系図香に名目を付くるも、後人の附会（ふかい）にして、その名目、何による事をしらず。当流は古法にしたがい名目を用いず。「源氏香」の時は、巻の名を書き付くべし。『瀧乃糸』に載するがごとし。三炷香も是より



や出ずらん。すべて、三炷香の名目もさだか
ならぬ事なり。
この組には、正傍の点のかけようあり。筆紙に
辯じがたし。
本書に云う「香は定まりて四色に過ぎず。」はし（端）
に「源氏香」と書き付くる時は、巻きの名を図
の下にも札紙にもしるすなり。

右、この文の説を按ずるに、むかしは源氏香
も香四種にて聞きしやうに見え侍る。
今は、源氏香といえば、是非、香は五種
にて、五々二十五包となして、その中を
五包とりて聞くなり。かくのごとくならでは源氏
五十二の名目にあいがたし。五種にてだ
に「桐壺」「夢浮橋」の前後の二帖には
図なし。四種にて五包聞くとも図は五十
にはなるまじ。この説、省略して書ける故

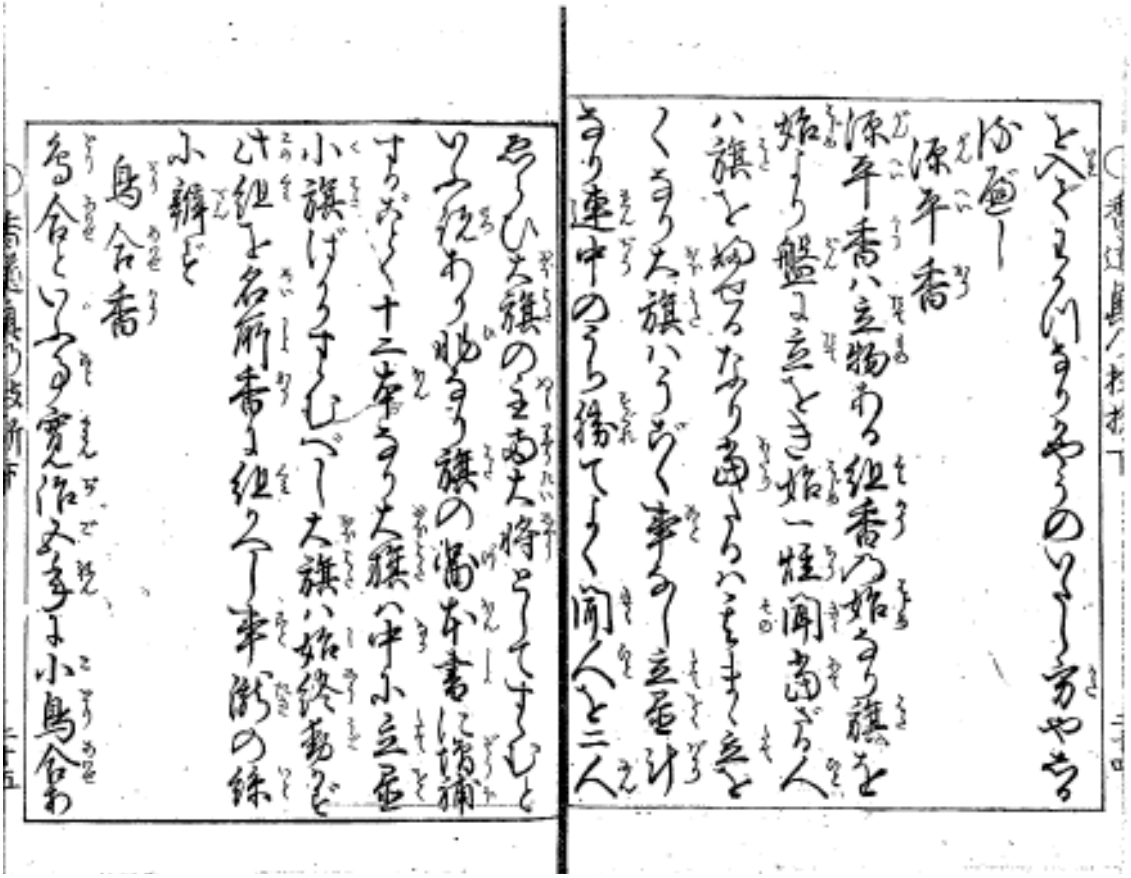


か、聞こえがたし。今、ここに挙げて、後の君子をまつ。しかし、五つはなれ、五つづつ「帛木」「手習」との図を除けば、四十八に迄には成るべし。

十炷香焼合

この組は、「連理香」の俤（おもかげ）にして、甚だ秘事有る事なり。口授すべし。師家よりの秘伝せるものなれば、今あからさまに辯じがたし。

また、一の札と二の札と二枚札筒に入れ候なり。余、皆同じ。この文章のごとくなれば、前一、後二の前後一つ筒に入ればしれがたかるべし。前後混ずるは、かまわぬ事ならば、記録の表、かやうに書きがたし。この事いかがあらん。当流には、筒なしに、折居を出し、一より十迄、前後段々に札



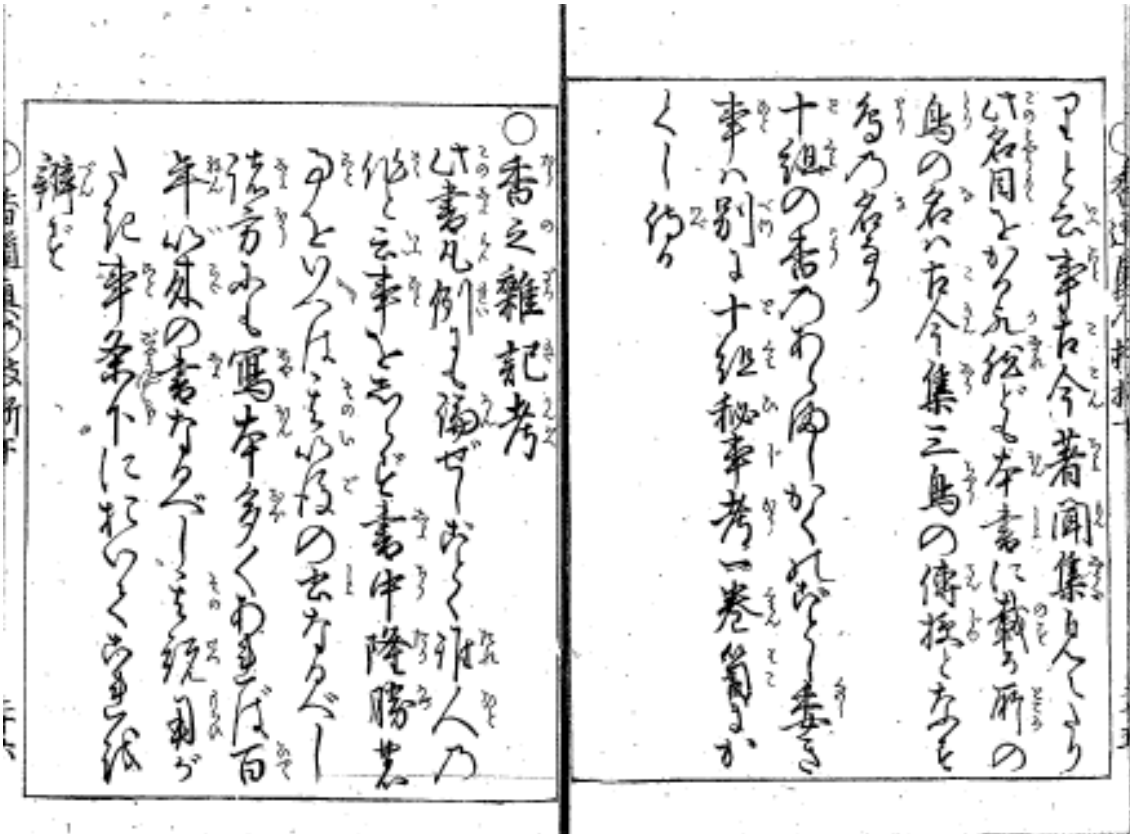
を入れてわかつなり。かようのいたし方やしるべし。

源平香

源平香は、立物ある組香の始めなり。旗を始めより盤に立ておき、始め一炷聞き当てざる人は、旗をふせるなり。当たりたるは、そのまま立ておくなり。大旗は、うごく事なし。立て置くばかりなり。連中のうち、勝れてよく聞く人を二人えらび、大旗の主、両大将としてすすむという説あり。非なり。旗の図、本書に増補するごとく、十二本なり。大旗は中に立て置く、小旗ばかりすすむべし。大旗は始終動かず。この組を「名所香」に組かえし事「瀧の糸」に辯ず。

鳥合香

鳥合香という事、寛治五年に「小鳥合わせあ

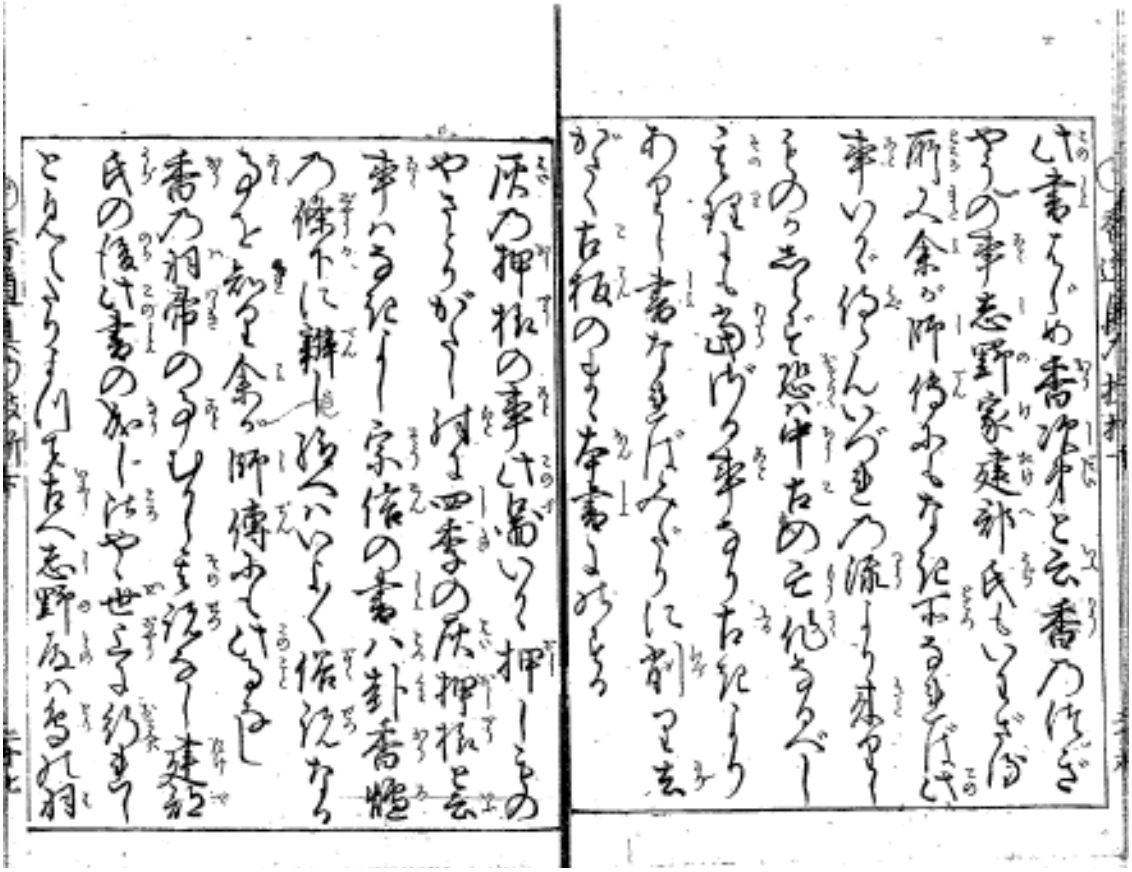


り。」と云う事、『古今著聞集』に見えたり。
この名目をかるか。然れども、本書に載する所の
鳥の名は『古今集』三鳥の伝授となす
鳥の名なり。(※)
※ 呼子鳥(よぶこどり)、稲負鳥(いなおおせどり)、百千鳥(ももちどり)

十組の香のあらまし、かくのごとし。委しき
事は別に『十組秘事考』一巻、笥にか
くし侍る。

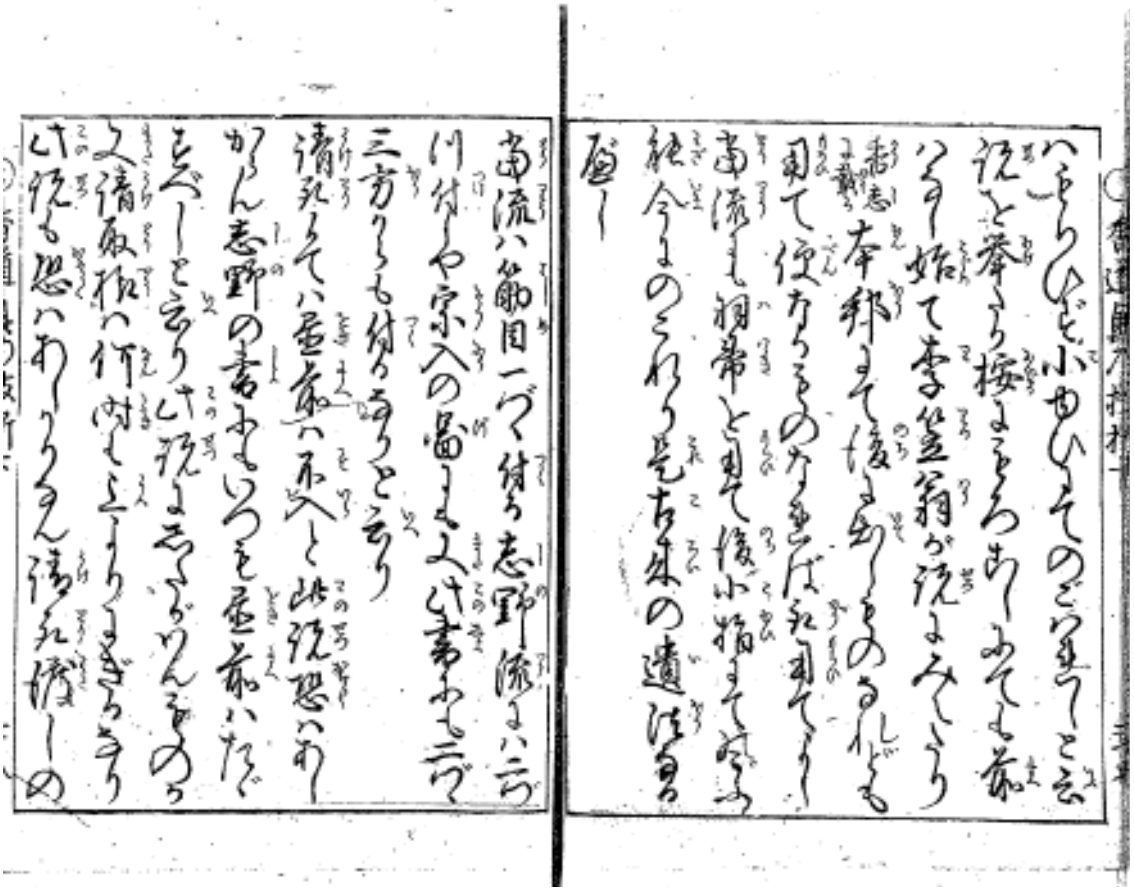
○香之雑記考

この書、凡例にも論ぜしごとく、誰人の
作と云う事をしらず。書中、隆勝の
事をいえば、その以後の書なるべし。
諸方にも写本多くあれば、百
年以来の書なるべし。その説用いが
たき事、条下においてこれを
辯ず。



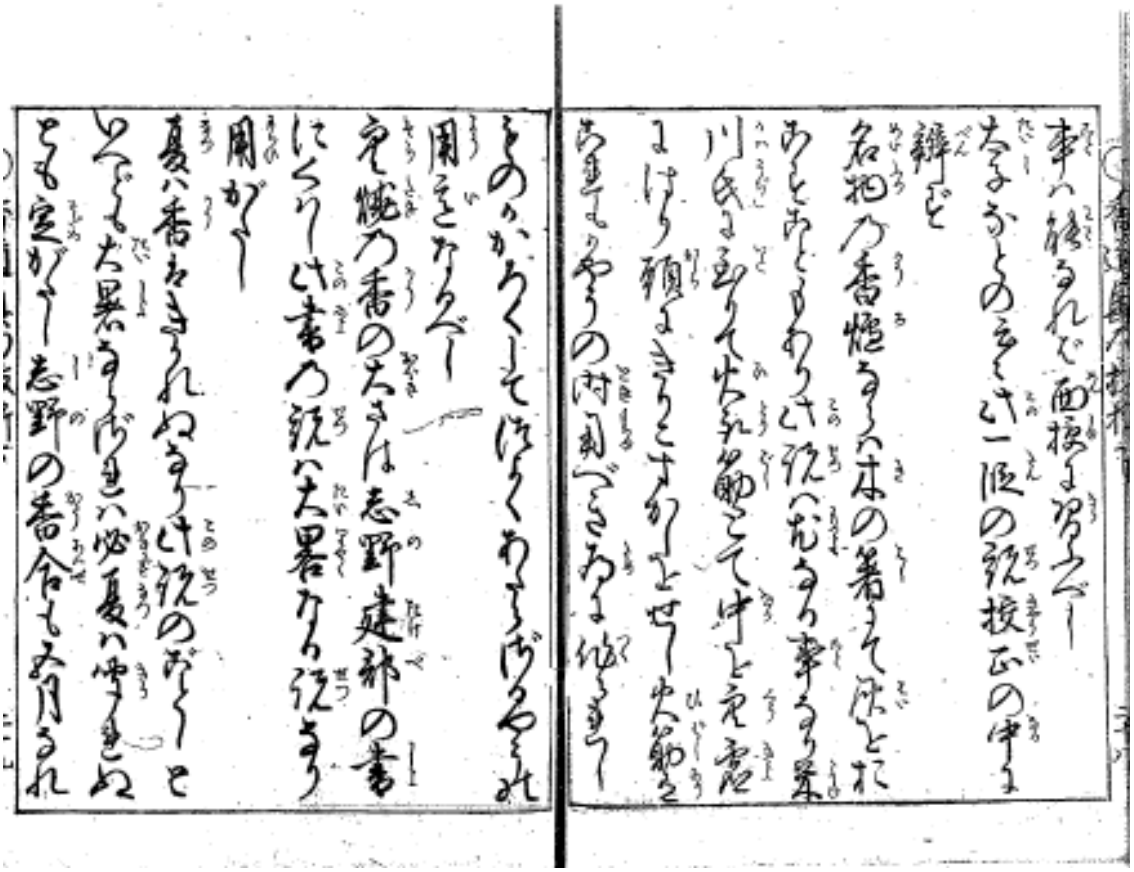
この書はじめ「香次第」と云う。香のつぎ
ようの事、志野家、建部氏もいわざる
所、また、余が師傅にもなき所なれば、この
事いかが侍らん。いずれの流より来たりし
ものかしらず。恐らくは、中古の亡作なるべし。
その理にも当たらざる事なり。古きより
ありし書なればみだりに削り去り
がたく、古板のまま本書にのする。

灰の押し様の事、この図いかが押しもの
や、さとりがたし。殊に「四季の灰押し様」と云う
事はなきよし。宗信の書は、「八卦香爐」
の條下に辯じ給えば、いよいよ俗説なる
事を知り、余が師傅にもこの事なし。
香の羽帚の事、むかしその説なし。建部
氏の後、この書の成りし頃、やや世上に行われし
と見えたり。よって古え、志野殿は鳥の羽

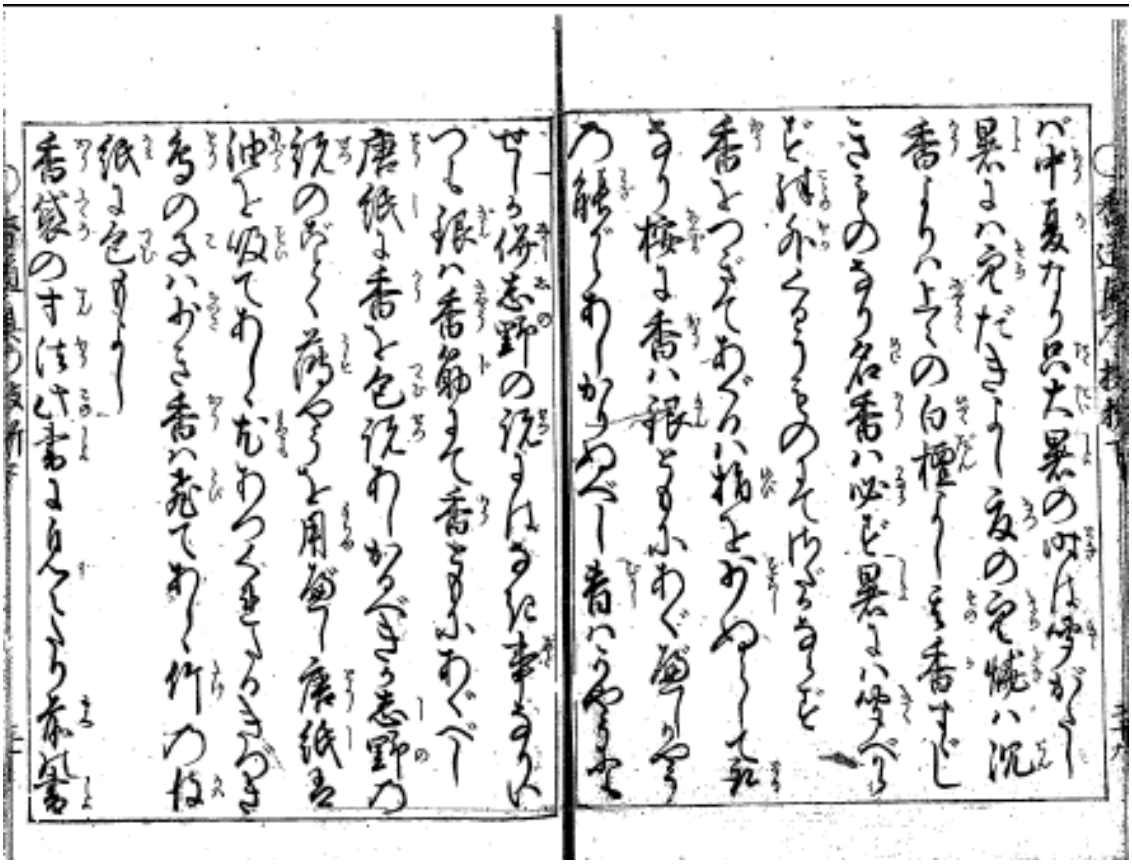


は用いずに、小ゆび(指)にてのご(拭)われしと云う説を挙げたり。按ずるに、もろこしにても前はなし。始めて季笠翁(りりつおう)が説にみえたり。(「香志」に載する。)本邦にて後に出しものなれども、用いて便なるものなれば、取り用いてよし。当流にも羽帚を用いて後、小指にてのごう能(わざ)、今にのこれり。これ古来の遺法なるべし。

当流は、筋目一つずつ付くる。志野流には二ずつ付けしや。宗入の図にも、また、この書にも二ずつ三方からも付くるなりと云えり。「請け取り候ては、置き前は入らず」と。この説、恐らくはあしからん。志野の書にも「いつも置き前はただすべし」と云えり。この説にしたがわんものか。また、請け取り様は何時も上よりにぎるなり。この説も恐らくはあしかりなん。請け取り渡しの



事は、能(わざ)なれば、面授に習うべし。
太子などの云々、この一段の説「校正」の中に
辯ず。
名物の香爐ならば、木の箸にて灰をお
こすこともあり。この説は、尤もなる事なり。米
川氏に至りて、火取筯とて中を空虚
にはり、頭にきりこすかし(切子透かし)をせし火筯あり。
これもかようの時、用ゆべき為につくられし
ものか。かろくして、つよくあたらざるようの
用意なるべし。
空焼の香の大きさは、志野、建部の書
にくわし。この書の説は大略なる説なり。
用いがたし。
夏は、香はきかれぬなり。この説のごとし
といえども、大暑ならざれば、必ず夏は聞かれぬ
とも定めがたし。志野の香合わせも五月なれ

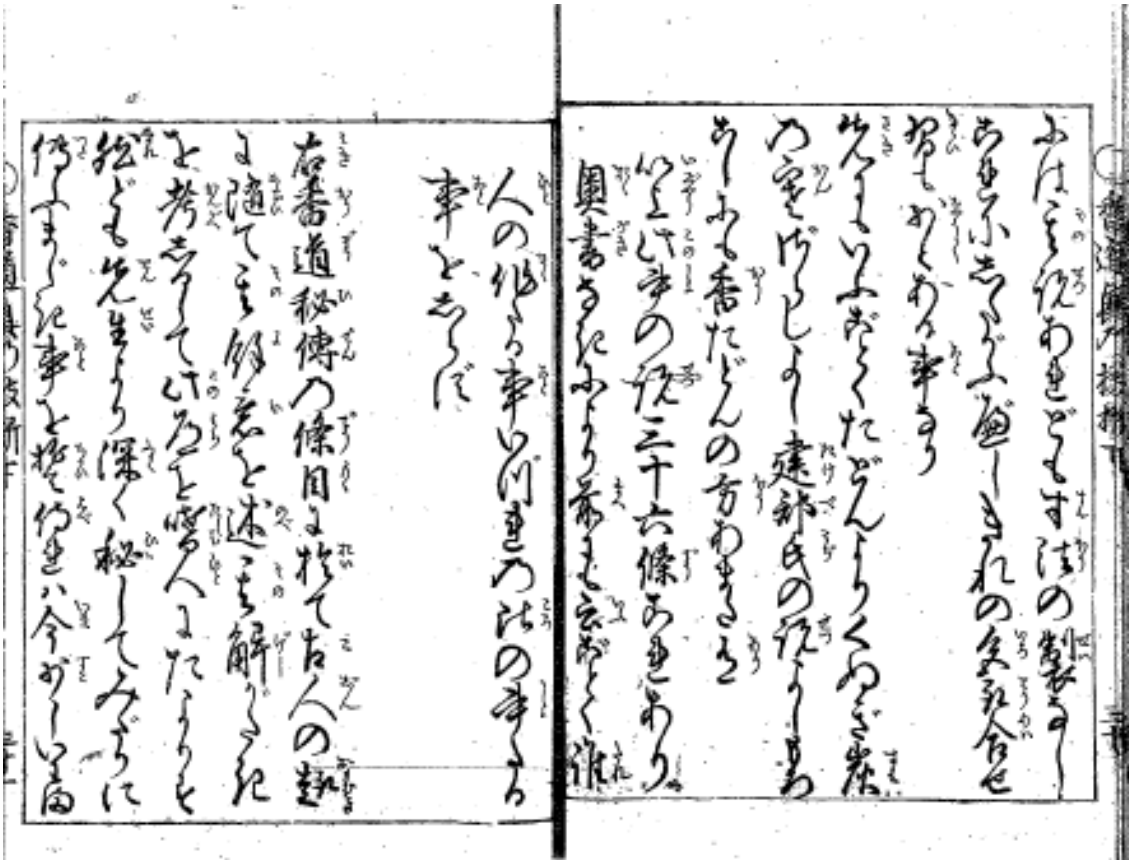


ば、中夏なり。ただ、大暑の時は、聞きがたし。暑には空だきよし。夏の空焼きは、沈香よりは、上々の白檀よし。その香すずしきものなり。名香は、必ず暑には聞くべからず。殊の外くるうものにてさだかならず。

香をつぎてあぐるは、指を少しぬらして取るなり。按ずるに、香は銀ともにあぐべし。かようの能(わざ)がらあしかりぬべし。昔はかようにもせしか。しかし、志野の説には、なき事なり。いつも銀は、香筯にて香ともにあぐべし。

唐紙(とうし)に香を包む説あしかるべきか。志野の説のごとく「薄よう」を用ゆべし。唐紙は油を吸いてあしし。尤も、あつくれたる「きづき(生漉き)」、「鳥の子」は、少さき香は、飛びてあしし。「竹の皮紙」に包むもよし。

香袋の寸法、この書に見えたり。前の書

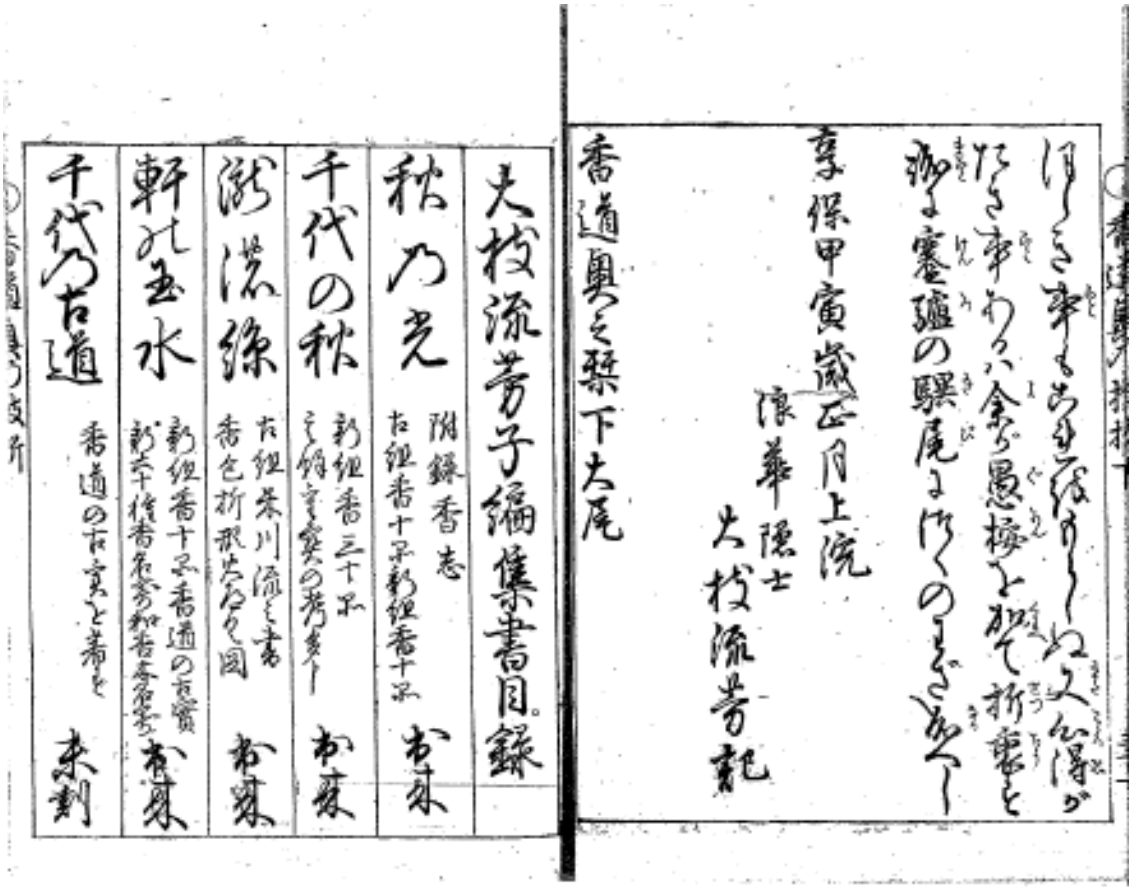


には、その説あれども、寸法の製なし。これにしたがうべし。きれの色取り合わせ、習いも少々あることなり。

先にもいうごとく、「たどん」より「くぬぎ炭の寒ざらし」よし。建部氏の説よし。もろこしにも香たどんの方あまたあり。

以上、この書の説三十六條これあり。奥書なきにより、前にも云うごとく、誰人の作たる事、いずれの頃の書たる事をしらず。

右、『香道秘傳』の條目に於いて、古人の趣に随いて、その餘意を述べ、その解しがたきを考えしるして、この道を嗜む人にたよりす。然れども、先生より深く秘して、みだりに伝うまじき事を誓い侍れば、今少しいわま



ほしき事もこれをもらしぬ。また、心得が
たき事あるは、余が愚按を加えて折衷す。
誠に蹇驢(けんろ)の驥尾(きび)につくのわざなるべし。

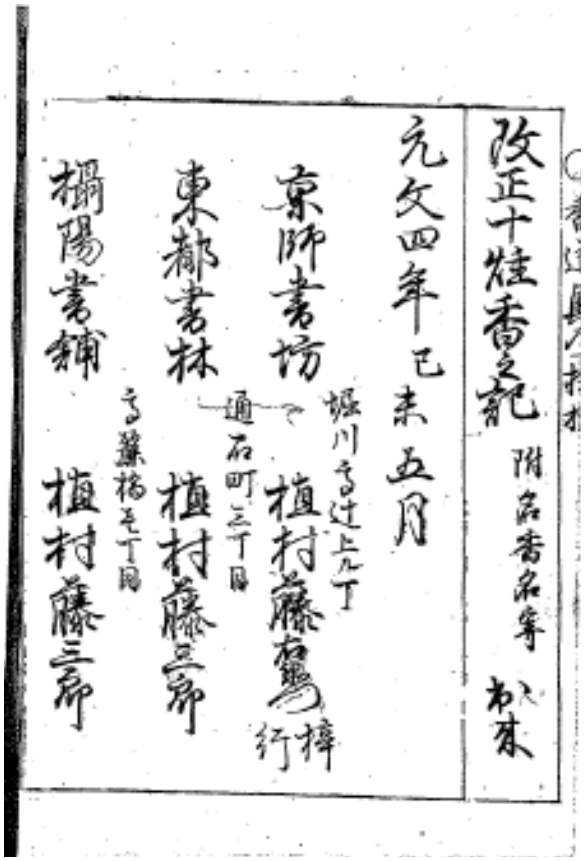
享保甲寅歳正月上浣

浪華隠士
大枝流芳記

香道奥之栞下大尾

大枝流芳子編集書目録

秋の光	附録香志 右組香十品、新組香十品	出来
千代の秋	新組香三十品 その餘、重寶の考多し	出来
瀧濃絲	古組米川流の書 香包折形、火道具の図	出来
軒の玉水	新組香十品、香道の古寶 新六十種香名寄、和香木名寄	出来
千代乃古道	香道の古実を著す	未刻



改正十炷香之記　　附 名香名寄　　出来

元文四年 己未 五月

京師書坊　堀川高辻上ル丁　植村藤右衛門　梓行

東都書坊　通石町三丁目　植村藤三郎

攝陽書房　高麗橋壹丁目　植村藤三郎

［参考資料］

『香道秘伝書・米川常白香道秘伝抄』

香書に親しむ会発行　清水書院　平成十七年十月刊

令和二年七月

『香筵雅遊』國井和裕